





正三位子爵福羽美靜公序文

漆間徳嚴和上題詠

真野觀堂大人題詠

濱田一貫翁題詠

渡邊海旭君評

中山信亨君評

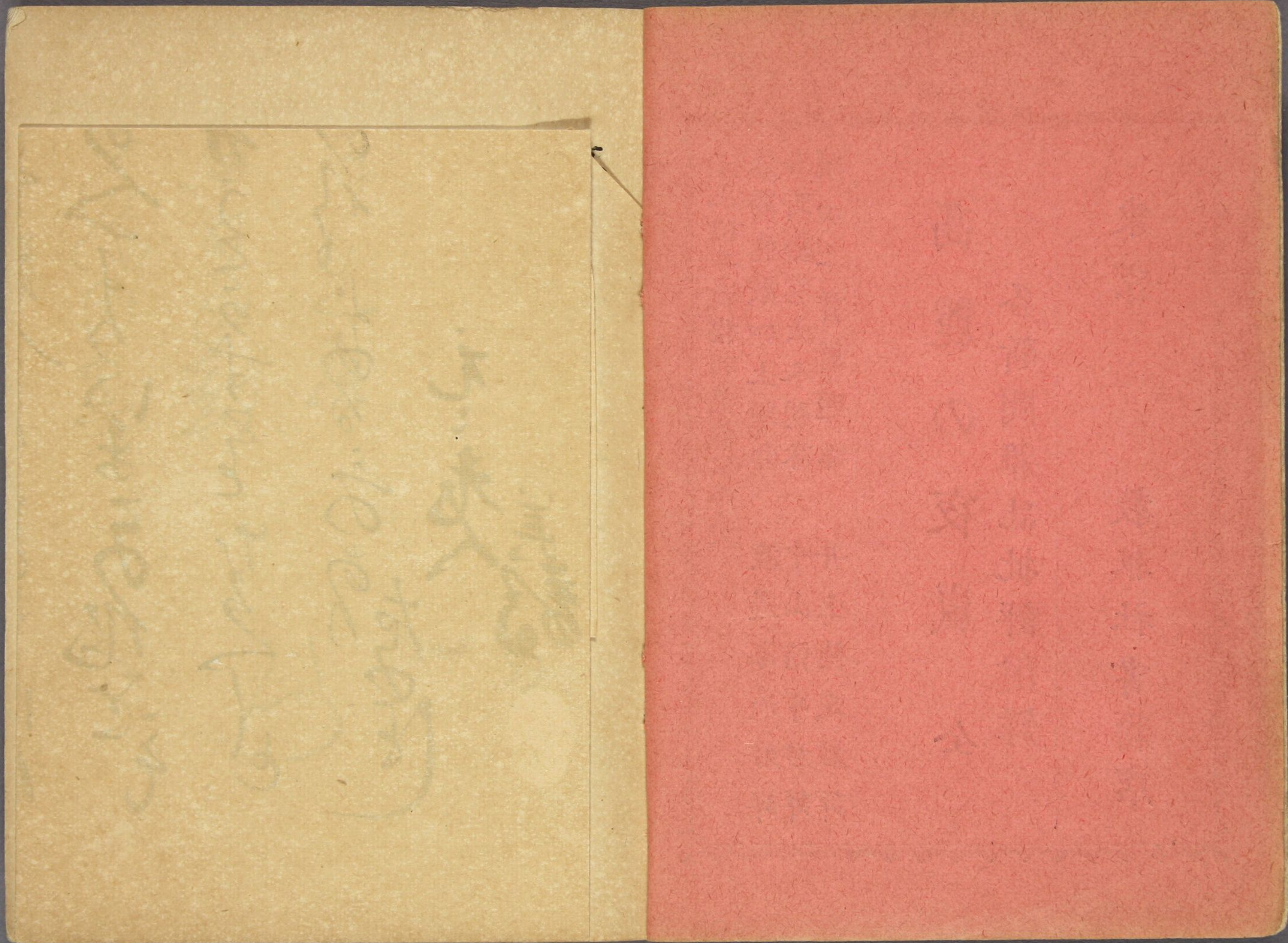
井上徳定君評

高麗の夜嵐 全

各新聞雜誌批評附録

東京

教報社書籍店



徳主氏之御書之、ふらふらふ
あを終、あを此、まうこれ、此書
の、あり井上氏の徳、又持麿の御石
濱田一母、表人、い、ま、あ、の、れ、旧、回
あ、の、あ、人、ま、う、い、ま、あ、の、れ、と、え

井上徳定氏之鑒の、
志願のを終、
先より井上氏の祖、
濱田氏界、
学問の、
濱田氏界、
おつり、
元々、
美都、
ひら、
おの、

高麗野の夜嵐

漆間徳巖

望月の五郎中尉

駒の革にかはねつゝみし武夫の

名はなかくにかくれさりけり

小櫻の妙蓮法尼

いにしへの花のたもともれよはしな

心ぞきよくすみろめの袖

高麗野の夜嵐をよみて

真野 觀堂

春の卷

もち月のひかりにほひてあらし山
みちもまよはぬ花の下かけ

夏の卷

子規なのりあふへき長舟の
つるきになつるこまのはり原

秋の卷

花にあらし月には雲のあたものを

うつやきぬたの音ろさやけき

冬の卷

降りつみしはゝろの森の白雪も
法のひかりにきゆるのとけき

高麗のゝ夜嵐をよみ
皇軍のいみしきをおも
ひ侍りてよめる

濱田 一貫

海原を西へいくさの日の御旗
八十島かけて照り渡るかな

古

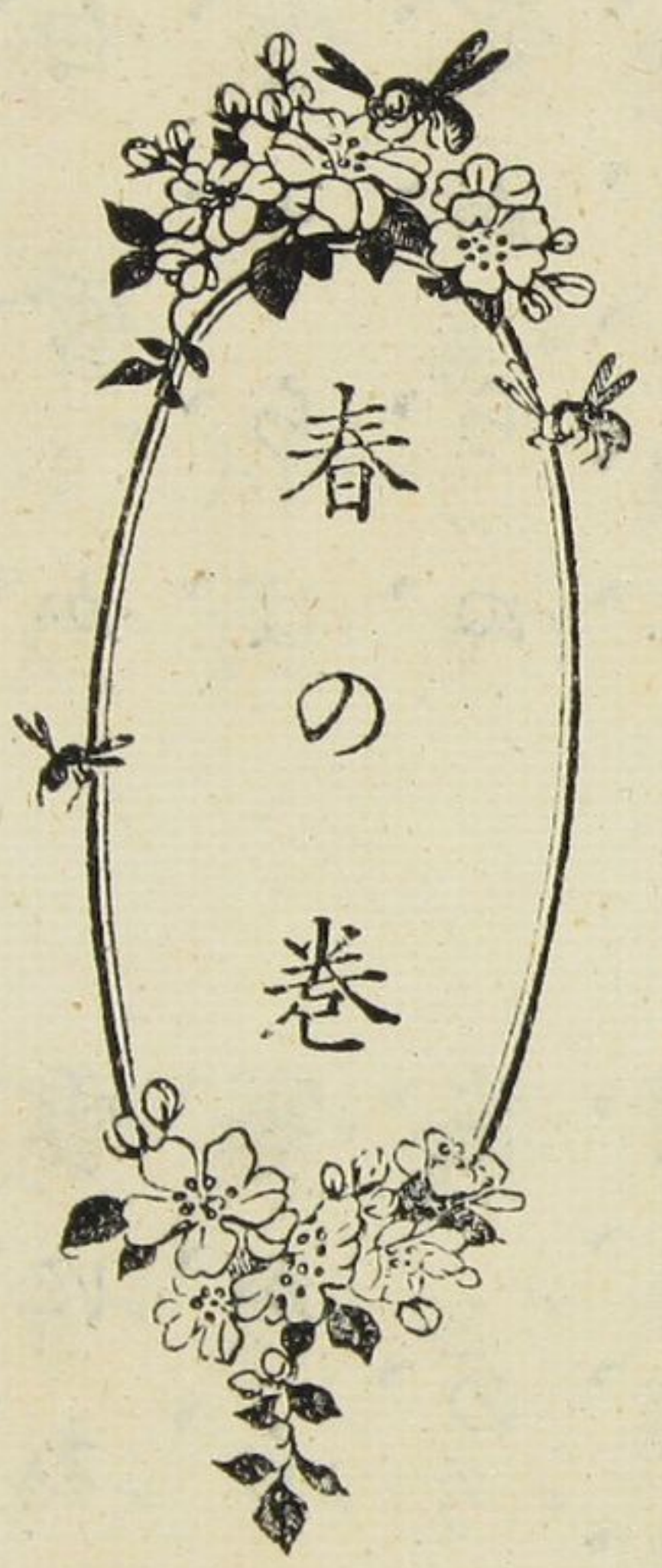
望月中尉を吊ひて

万代にさかゆる花も一枝は

ともらふ為に手折りけるかな

高麗野の夜嵐

壺月 渡邊 旭評
櫻雨 中山 信旭評
松雨 井上 徳定作



文字爛絢、
紅雲白雪、
紛々相映、
天下第一

白雲か、
雲にあらかな
雲ならば、
にほはとも乃を

翠紅之仙
寰、非此
妙筆、豈
能寫其秀
邪。

名山名川
名花、舒
來井然有
法。

に、ほ、ふ、な、る、
お、り、た、ち、て、
白、雪、か、
雪、な、ら、ば、
寒、か、ら、ぬ、
ふ、り、し、き、て、
嵐、山、
此、の、花、を、
さ、き、い、で、ぬ、
け、ふ、を、こ、ろ、
大、堰、川、
此、の、花、を、
散、り、ろ、め、し、
い、ま、を、こ、ろ、
其、の、川、に、
底、に、ゆ、く、
水、鏡、
代、の、影、を、

花、の、白、雲、
去、ら、ぬ、な、り、け、り、
雪、に、あ、ら、ぐ、な、
寒、か、ら、ま、し、を、
花、の、白、雪、
消、え、ぬ、な、り、け、り、
峯、に、も、尾、に、も、
咲、も、の、こ、ら、で、
ほ、づ、枝、も、な、く、て、
盛、と、に、ほ、へ、
岸、に、え、邊、に、も、
散、り、も、は、ぐ、め、で、
し、づ、枝、も、お、く、て、
時、と、さ、き、け、れ、
風、ふ、き、あ、た、り、
水、も、か、ぐ、は、し、
治、ま、る、御、代、の、
う、つ、し、け、る、ら、し、

宛然一幅
嵐峽之畫

景狀如見、

此の山に
花になく
鳥のの聲
世の幸を
うち日さす
うち日さす
ろこゆゑに
あまさがる
あまさがる
あまさがる
一筋の
二方の
屋形船
筏舟
大和歌
ろの山の
漢の歌
この川の
連のも
かくはしも

霞たなびき
鳥ものさけい
開けゆく世の
歌ひけるら
都ひ女も
花をかざし
鄙の荒男も
枝を手折りつ
橋をわたらひ
岸をゆきかひ
或はのぼしつ
或はくだしつ
歌ひ興どて
瀧にひゞかひ
うたひごよみて
波にかとへり
立ぬ御代とて
あくがれ遊べ

四

五

無此一結、
全幅惟是、
粉奢誇華、
之凡筆有、
此結束、
方是光焰、
萬丈。

無數看花
人、一人
無解花神
山靈之意
乎。

釵光鬢影
熱鬧嘈擾
之俗境、
正消失、
幽麗高雅
之勝景漸
現、文、字
亦、自、適、之
佳。

小枝さへ、
かくばかり、
人は、も、
けふころは、
人は、も、
いまころは、
花ならは、
櫻ころは、
人ならは、
ものゝふは、
あるやあらずや、

鳴らぬ御代とて、
うかれくるひて、
弓矢の道も、
あすれやすらめ、
刃の錆も、
とがでやあらめ、
あらいの櫻、
今もかはらね、
大和武士も、
今もかはらで、

夕風に
鐘の音に
あらしやま
大お川
仙人の

花もちりかひ
人もかへりて
春のあはれは
夜の景色は
さかひもかくや
めでたかりけり

出

御佛の

かくあらん

山の端に

川の瀬に

音すみて

影さして

渡月橋

若駒に

大悲閣

なるかゝに

ゆらくと

しづくと

久方の

ちる花の

あぢみゆく

分けてゆく

みやびをの

すさびなる

御國もかくや

をかかりけり

月うちかすみ

水うちながれ

岩間をくぐり

よこみに浮ぶ

をりしも見ゆれ

鞭をもあてず

ときしも鐘の

響をむけて

手綱ゆるめつ

あぶみならいつ

月に水かひ

岸にいこひて

ひとは誰ろも

由は何にろも

みやびごころの

そゞろありきか

紫驪緩御、
吟哦遊于、
静境咄何、
者風流兒。

春霄多趣之所。

餘音搖々。

第一段、寫艶麗、第二段、描幽婉極、今至第三段、悄絶之景。

悽絶之景、一言不説、花、以箇少女摸之。

故やある
言問へど
かすかにて
はるかにて
あどにたい
水の音
春風の音
なかりけるかな

夜の旅路か
駒の足音
櫻のなみ木
れぼろなりけり
答ふるものは
花間を渡る
聲より外は

神さびて
壁れちて
大悲閣
観世音
れぼろ夜は
月影は
春の夜の
さよなかの
白波や

松杉いげり
燈火くらき
鐘もひびかず
人も詣でで
いよ／＼ふけて
ます／＼かすむ
ろのさびしさも
ろのけうとさも
あらしき曲者

よきよし
トスレ

狂雲惡風、
驀然急起、
將香消玉、
碎、月影、
陰暗風聲、
凄然。

少女何夫
嬌勇巴
姫邪板
額邪美
醜抑如
座令人
懊。

よするとも
乙女子は
ぬか川きて
曲者は
走りきて
かこつなる
さしひかへ
あなあはれ
れもげなる
女郎花
荒き手に
あなあはれ
いとふなる
姫小松
くせもの
れもひい
うちふせ
なげやりつ

れもひもいらで
れまへにしばし
あろがみけるを
俄にそれと
小笹の風も
尾花の袖を
戯れろめぬ
夕の露も
嗟峨野の里の
あはやあら男の
手折られやせん
朝の霜も
愛宕の山の
あはやくまの
ひかれやせんと
忽ち一人を
俄に二人を
しばしあらそふ

救星來。
トスベレ

英姿颯爽。

は、や、あ、ざ、に、
曲、者、は、
白、波、は、
一、打、と、
い、ま、お、そ、と、
此、の、時、也、
彼、の、を、り、也、
騎、馬、の、武、者、
鞭、あ、て、い、
空、高、く、
き、こ、え、き、て、
千、里、ゆ、く、
す、ご、く、い、て、
其、の、音、に、
曲、者、は、
さ、ゝ、が、に、の、
そ、の、ご、と、に、
此、の、聲、に、

な、ほ、こ、り、す、ま、の、
怒、り、に、い、か、り、
猛、り、に、た、け、り、
刃、か、ざ、し、て、
う、ち、向、ひ、け、れ、
遅、く、あ、り、け、ん、
早、く、あ、り、け、ん、
か、く、と、し、り、て、か、
馳、せ、や、く、る、ら、い、
嘶、ゆ、る、聲、も、
近、か、く、な、る、ら、い、
蹄、の、音、も、
遠、く、あ、ら、ぬ、
れ、そ、れ、や、い、けん、
俄、に、う、せ、て、
く、も、の、兒、ち、ら、す、
い、そ、ぎ、に、げ、け、り、
れ、ち、や、い、つ、ら、ん、

草賊醜狀、
好笑々々。

白波は

忽ちきえて

六空の

雲か霞の

そのごどに

いろぎかくるゝ

さまのれかしも

落花狼籍

あなやいま

太刀風すさぶ

亂れきて

小萩の花の

それにも

さきくありか

なれが身は

電光石火

あなやいま

火花はげしき

閃めきて

ふあばの草の

これにも

ことなかりか

なれが身は

更けゆく夜半に

かくばかり

かくはれはすぞ

いかなれば

すごき御寺に

かくばかり

かくはき玉ふ

いかなれば

さほのさすがに

たかせぶね

尤是有情
之語。

夜深如、
深窓閨秀、
不可獨遊、
巷花門柳、
何有此膽、
勇有所以、
小怪訝有。

嬌態綽々、
媚態如見。

いぶかーみ	かくと若武者
尋ぬれば	うれー涙に
吳竹の	乙女はやがて
青柳の	みだれー鬢の
そのかいら	いく田の森の
いくそたび	さげてぞやをら
紅葉ばの	その手をつかへ
あはれさみ	身もすそ川の
妾ころ	氏をば春日

點出佳人
經歷。

小櫻と	名をばとなへて
ものゝふの	流なりけれ
さいつ年	妾の父は
沖つ波	汐の八重路を
こぎゆでて	こまのはりはら
釜山浦に	行き玉ひけり
今そはや	家もいできぬ
家業 <small>なり</small> も	身もさだまりぬ
疾くこよと	父のうれーき

玉章に

繼母諸共に

明日にしも

このふるさとを

いで立たん

舟路の旅の

梶枕

いとやすかれと

かたいどの

唯ひとすいぢに

いのりける

時もうたて

曲者の

けがれし足に

はづかしの

森の下草

あはや身は

ふみいたがれん

とばかりの

をりしもうれし

駒の音

人の聲して

甲斐が根の

かづらの橋の

あやふきを

まぬがれにけり

君はしも

神にやまさん

君なくば

いかになりけん

主はしも

佛にままか

ぬしなくば

心かにはてしか

生々に

身をかゆるとも

無限之感
謝

身をまじ
しとスレ

トスレ
年を
ふも
何者可相思々々而非
者相忘敬切神
者不愛生佛

人、果然是美人

萬古之大案、
鐵案、花神、
峽之花、聽、
山之靈、頭、
之點、頭、微、
笑。

此のなきけ
劫々々に
其のめぐみ
まこと君
あはれろの
まこと主
あはれその
いふさへも
このさまは
月影か
花笠か
ろを聞き
ほゝゑみて
うちまもり
ほめたゝへ
邦こそは
久方のの
かそらぬを

かへしまつらめん
年をふるとも
むくいまつらめん
いづくの誰そ
御名をなのりね
いづちのひとが
處をとのみ
れもはゆげなる
なににたとへん
月、蓋ちなん
花、閉ぢなん
雄々しき武者は
乙女のすがた
ておみのたくみ
さてかたりけり
いづくも同ど
天の下には
秋津島ねの

壺月生評、風調高雅、如讀一篇、正氣歌、有寶刀鏗、然、鳴匣、中之概、老手、僕有和人手、舊作曰、人、姚紅魏紫、豈容誇、

万朶香雲、冷露華、袖手苦吟、春月下、細看皇國、美性花、雖鄙調、亦此意也、則添錄、見醜以

外。に。一。も。國。に。そ。は。あ。ら。が。ね。の。か。は。ら。ぬ。を。よ。ろ。に。し。も。お。れ。や。其。敷。島。の。此。の。こ。ゝ。ろ。ひ。ら。き。て。は。武。士。の。其。た。ま。し。ひ。凝。り。て。は。さ。れ。ば。こ。そ。ひ。ろ。け。れ。さ。さ。は。な。れ。さ。さ。る。を。し。も。

こ。の。花。さ。か。ね。い。づ。ち。も。同。じ。地。の。上。に。は。豊。葦。原。の。櫻。ろ。生。は。い。さ。く。ら。は。や。が。て。大。和。心。よ。れ。を。さ。ま。る。御。代。に。万。朶。の。櫻。櫻。は。や。が。て。魂。な。る。よ。み。だ。れ。し。世。に。は。百。練。の。鐵。高。麗。の。は。り。原。む。べ。さ。か。ぬ。な。れ。唐。士。の。山。む。べ。生。は。い。は。ぬ。な。れ。畫。は。鼓。に。

眞是解方風
 流者花間
 知紫騮之
 鞭紫騮之
 客實此
 俊才

稜々氣概
 中有此風
 趣有日本
 武人之特
 色

此の山を
 さるをしも
 其の川を
 にぞす人
 見ざるらん
 けがす人
 とはざらん
 こゝもへば
 山の端の
 影にころ
 さてはあれ
 うこもへば
 川の波の
 音にころ
 さてはあれ
 あはれこは
 とばかりに
 ひらかせて

人はけがせり
 畫はゑらぎに
 人はにぞせり
 花をい見れ
 花のこゝろを
 はなをいとへ
 はなのこゝろを
 まことの花は
 かすめる月の
 見るべかりけれ
 かくは來しなれ
 花の心は
 すみながれゆく
 いるべかりけれ
 かくはとひけれ
 万葉の櫻
 心の花を
 事しなければ

君か代の

にほひとならん

あはれろは

百練の鐵

とばかりに

心のほろを

凝りさせて

事しれたらば

修羅の野の

刃とならん

願より

れぼろ月夜に

鞭あげて

あくがれいで

家路より

あらしのもまに

尋ねきて

汝をすくひよ

益是有情
之人

契しもの

一樹の蔭の

ろもやろも

ありやしにけん

えにしもの

一河のながれの

よしやよし

ありやしにけん

ますらをの

曲者來とも

よしやよし

五郎ありけり

望月の

月いりぬれど

いざやいざ

我ぞありける

看花却將
花而歸何
等多福艶
羨々々

いざやいざ

れくりまつらん

脫塵之清
僧亦有此
種之文字
邪。

玉人不言、
嬌羞多時、
櫻花不語、
春風有情、
不知英雄、
心緒、果

否。寫來紅情
綺緣未
說才俊之
姓名、作
者何、揄
人之甚。

家いづこ
いでやいで
路いづら
とばかりに
海よりも
言の葉の
を、とめぎの
くれなゐに
花のうで
うれいとの
答に、は
こもりけるらん

な、あやぶみろ
ともなひゆかん
な、はゞかりろ
な、さけありろの
深きめぐみの
れく露いか
袖にしむらんに
あからむ顔に
うち覆ひてど
唯ひとことこの
千々のねもひや

三月十日

櫻雨生評

春卷是全扁之序文、故先頼鶯歌蝶舞之勝景、描
流水落花之奇緣、微出卷中兩主公、以明其性狀
一斑、正是全卷之地盤、有埋伏、有襯染、配布
點綴、整々契則、讀者宜洞觀主人用意周密經營
慘憺也、若夫至如運筆華麗、舒事富膽、世自有
定評、不必贅評疣論、以不害真味也。

五月十二日

燈下壺月生誌

開卷一番、
 點出瀟灑、
 澹蕩之景、
 潑然令人、
 意爽冷與、
 前卷之穠、
 麗爛絢反、
 映極爲造、
 構之妙矣、
 古人有句、
 曰、却將、
 錦樣鶯歌、
 地變作元、
 暉水墨圖、
 以可爲評、
 也。

み、あ、ぐ、れ、は、
 近、江、ふ、ど、
 み、れ、ろ、せ、は、
 滋、賀、の、浦、
 こ、の、お、き、を、
 彼、の、み、ね、を、
 う、ち、み、て、は、
 な、が、め、て、は、
 い、く、さ、ぶ、み、
 や、ま、と、だ、ち、
 し、き、し、ま、や、
 き、た、へ、つ、い、
 百、敷、や、
 み、め、ぐ、み、に、

み、ざ、り、か、さ、な、る、
 峯、い、と、た、か、く、
 し、ら、な、み、よ、す、る、
 沖、い、と、遠、い、
 家、の、は、し、る、に、
 窓、の、杭、に、
 き、の、ふ、も、け、ふ、も、
 け、ふ、も、あ、し、た、も、
 ゆ、ふ、べ、に、ひ、ら、き、
 あ、し、た、に、ふ、り、て、
 や、ま、と、ご、ろ、を、
 れ、ほ、し、が、た、て、つ、
 す、め、ら、み、こ、の、
 た、も、と、ぬ、ら、し、つ、



至此方
出俊才之
姓字。

淡蕩之景、
有淡蕩之
事、倏變之
景、倏有倏

變之事主
人用意深
所。

日、を、れ、く、り、
軍、營、に、
た、れ、な、ら、ん、
望、月、の、
句、ふ、な、る、
人、が、い、ひ、ける、

鳴、神、は、
音、羽、山、



月、を、む、か、へ、て、
か、よ、ふ、は、た、れ、ろ、
名、も、か、ぐ、は、し、き、
桂、の、ご、と、に、
五、郎、中、尉、と、

近、く、な、る、ら、い、
れ、と、ひ、ぐ、く、な、り、

柴、舟、は、
膳、所、の、濱、
黒、雲、は、
か、り、き、て、
夕、立、は、
し、き、り、ま、て、
此、の、夜、も、
文、机、に、
ふ、み、の、ひ、も、

か、へ、り、く、ら、い、
真、帆、見、ゆ、る、な、り、
は、や、比、良、山、に、
峯、も、小、暗、く、
は、や、唐、崎、に、
松、も、け、ぶ、れ、る、
五、郎、は、ひ、と、り、
つ、く、く、よ、り、て、
と、く、く、い、ぞ、ぎ、

燈火をかかぐるをりり
 さけぶ聲きこゆる時
 門の戸をたたくものねと
 いとはげしゆゝしきことと
 太刀佩きて雨戸あくれば
 こはいかに佇む人の
 電報とさし出す紙は
 ろもいかに父か病の
 重してふしらせなりけり

乍陰乍晴、
恰是五郎
胸中之景。

かくと見て心もろらに
 氣もろがる馬にくられき
 しづはたの手網かひくり
 あをやぎの鞭うつ時
 雲はれて雨さへやみて
 弓張の月影きよく
 逢阪の山の端高く
 さしいでし行手を照らす
 光うれしも

氣概凜然、
眞情沛乎、
有此慈父、
何得莫此、
孝子邪。

私、さ、日、大、し、こ、し、や
 の、ゝ、本、君、た、よ、づ、よ
 の、げ、の、の、が、ひ、ま、五
 の、て、の、の、ひ、こ、り、朗

看、汝、國、馬、し、父、咳、む
 護、に、の、の、ば、が、も、ね
 を、か、ま、み、し、が、を、の、い
 さ、ば、も、ま、ま、と、こ、や、た
 せ、か、り、へ、ろ、葉、み、み
 つ、り、に、に、め、に、ぬ、も



精、鍊、之、文、
字、紙、面、
自有、光彩、

想、起、予、
年、二、十、一、
小、西、湖、畔、
一、問、葉、屋、

夜、汝、山、花、や、か、ま、馬、や、
 半、な、な、な、よ、し、の、に、い、
 の、れ、ら、ら、五、お、ふ、の、ば、と、
 雨、ば、櫻、ば、朗、や、ふ、る、る

朝、あ、ま、あ、ひ、い、見、な、汝、
 の、ら、だ、さ、と、と、れ、が、が、
 の、の、だ、さ、は、と、ば、そ、そ、
 霜、の、も、ひ、は、と、あ、の、の、
 も、い、な、に、の、の、あ、の、身、
 へ、と、る、句、ふ、り、や、も、も

侍家嚴病時怡仲夏夜方三更鐘聲低迷月光蒼涼在枕燈脊嚴臥喘脊激餘喘脊厲瘦軀告予曰汝夫逝矣我將力焉唯一語實爲今生之永訣矣春夢秋幻爾來四年踏踏落魄學未精德甚涼

鳴乎春慈誠已多矣今及讀此扁之事當歷之不覺目然者自失大息

眞然忠臣出孝子之門方今之青年豪狂奔父不顧憂德悖倫歿者盡國事鑑也

やすまさで
くりごとを
あなや父
君の爲
そのなかも
ろのうちも
かをならぬ
かたわれぞ
ついつい

常なればば
事あらば
霜こほる
難波瀉
三の浦
とばかりに
これやこの
あなやわれ
其手さへ

やすめといはで
くりかへしけれり
なにのたまはす
千軍万馬の
硝煙彈雨の
ものゝかすかは
みものゝふの
われしのばなむ
いっよ七夜は

身をこそいとへ
雨ふる銃丸も
劔もなにか
あいのかればと
なみのいらたま
れもひすゝめよ
やまごゝろよ
汝が脊をなづる
其疲勞さへ

文勢脈々、
悲哀含、
壯烈、壯

烈又生悲
哀、如月
夜遙聞洞
蕭之音

一滴至情
之眞淚、
萬斛義烈
之血

父の爲

とばかりに

いらへれど

看護には

つかれけん

弱りけん

枕邊に

あはれさを

ひさかたの

つゆねぶらすも

ものいさましく

いく夜かさねし

ほねみやいかに

こころやいかに

いつしか父の

いねそめにける

ろらにもしるか

月いとときよし

ひたひたに
そびらに
かたいと
千はゆる
乗りいで
ふみよた
きのふこそ
彼の敵を

銃丸ころ通れ
矢さへたて
たひとす
かみにちか
こまのはり
やつのみち
かこの城に
打ちあらひ
このとりて

愴然惻然、
至情感人。

い、ま、も、な、ほ、
あ、れ、な、れ、の、
れ、と、に、さ、へ、
山、の、か、ば、
海、の、か、ば、
お、も、へ、れ、ど、
身、に、は、し、む、
ち、の、み、の、
こ、の、夜、し、も、

耳、の、ろ、こ、に、が、
川、の、な、が、れ、の、
お、も、ひ、い、で、け、り、
く、さ、む、す、か、ば、ね、
み、つ、く、か、む、ね、ど、
こ、よ、ひ、の、風、ぞ、
こ、よ、ひ、の、雨、も、
父、上、い、か、に、
し、の、び、ま、す、ら、ん、

此、の、え、み、し、
い、ま、よ、り、は、
あ、す、よ、り、は、
皇、軍、の、の、
も、の、ふ、の、
戦、へ、ふ、の、
政、め、つ、れ、ば、
こ、れ、や、こ、の、
ふ、る、さ、と、の、

斬、り、こ、ろ、し、け、れ、
い、づ、ち、を、つ、か、ん、
い、づ、ち、を、つ、か、ん、
む、か、ふ、と、り、て、は、
政、め、い、る、ろ、は、
打、ち、か、つ、の、み、ろ、は、
打、ち、か、つ、の、み、ろ、は、
い、く、さ、に、つ、け、て、
父、の、を、し、へ、は、

可憐俊才、
千思萬想、
右難左難、
展轉反側、
大苦心之一、
所文勢一

霜、雪の
こをいひ
ものびの
もふもの
利心も
霜のど
さはあれど
せくみづの
みちのくの
かすかに

は、そのはの
世にまさば
た、ひどり
の、きはに
と、この上
い、かにい
よ、べのゆ
け、さのい
いたつき

さ、はりもせず
か、れをおもへば
鐵、よ、り、か、た、き
と、けむ、ば、か、り、ぞ
雪、の、ご、と、く、に
澤、田、の、う、き、に
ふ、か、く、れ、も、は、い
の、の、ぶ、の、山、路
の、の、ば、ざ、ら、な、ん

母、君、だ、に、も
か、た、り、あ、は、ん、を
い、ぶ、せ、き、か、や、の
さ、び、し、き、ま、ど、の
い、か、に、す、ご、い、て
た、は、し、ま、す、ら、ん
ふ、る、や、ふ、る、さ、と
た、く、や、翁、の
老、の、み、み、に、は

低一昂、
緩一急、
能寫得胸、
中之苦境、
妙妙

接合關鎖、
絕奇古今、
畫夢幻之、
境、如、此、
巧者、少、
爲、可、少、
文、才、可、
恐。

時、あ、れ、ね、ん、と、あ、れ、
あ、れ、あ、れ、
此、の、陣、所、
彼、の、露、營、
い、ぎ、や、い、ぎ、
切、先、も、
う、ち、い、づ、み、
れ、も、へ、れ、ば、
い、の、ぶ、れ、ば、

大、筒、の、
折、れ、
硝、煙、の、
い、ま、ぞ、い、ま、
我、駒、の、
か、け、む、と、て、
我、駒、に、
慕、然、
銃、丸、の、
雨、

俄、に、ひ、く、
征、衣、か、た、い、く、
銃、を、ま、く、ら、に、
ふ、く、風、さ、む、き、
れ、く、霜、い、ろ、き、
に、ぶ、り、こ、ろ、す、れ、
う、ち、み、だ、れ、て、は、
れ、も、ひ、の、川、に、
忍、ぶ、も、い、す、り、

音、に、太、刀、と、る、
忽、ち、あ、が、る、
な、か、に、駒、た、て、
い、こ、の、え、み、い、を、
蹄、の、塵、に、
風、に、嘶、ゆ、る、
ひ、と、鞭、あ、て、
か、け、い、る、な、か、
劍、の、林、

殘燈如豆、月影淡々、孤枕露露、尤極蕭條、夏夜短踈、之真景、寫得甚妙、非一種之、愁人、則、有這般之、好文、字、邪、

とみさぐれば、身はちゝの、有、明、の、燈、火、も、は、か、な、く、も、韓、山、や、唐、士、や、け、ふ、に、し、も、吹、き、く、ら、ん

こはともいかに、枕邊ちかく、月影うすく、影さへきえて、さめし夢なり、醒、き、風、血、沙、の、雨、の、は、た、い、ま、に、し、も、ふ、り、や、い、で、む、と

忠烈之事、孝順之道、紛錯之感、益極慘憺、之意。

きのふけふ、其のとゆ、よひのまの、其のとゆ、ろはとまれ、つかのまも、父、上、の、いたつきの、はらはすむ

ほのかにきゝゝ、ゆめにもみゝか、父のをゝへの、うつゝにみゝか、かくもあらなむ、ひとひもはやく、病のあだを、とりての城を、ゆみやのまへも

此歳四月、
畏友櫻雨、
得病、瘡、
沈甚、重、
藥餌、水囊、
呻吟、苦楚、
凡、吟、五、十、
日、看、此、間、
君、看、護、甚、
力、看、凡、給、
藥、奉、餌、
至、澡、灌、便、
睡、之、細、
干、般、之、雜、
務、皆、莫、不、
辨、厚、交、誼、
之、怡、

如父子、
人皆泣、
之至情、
今見此、
看護奉、
之狀、一、
々點出、
如麻姑、
瘡者、洵、
是君至、
自然得、
之詞、句、
故不巧、
而自巧、
他雲、雨、
覆豈、得、
如、此、之、
文、耶、之、
幽、玄、之、
麗、華、之、
筆、

陥さすは

はづかくな

父上の

あなはれ

いはよりて

あなはれ

なくく

やよ五朗

看護を

つるぎのまへも

みの詮な

顔ませれば

よる年なみの

肉さへおちて

むかしのかげの

みてれしとれば

まだいねもせで

おしやたふか

のたまはするが

うれしやど

あれどかな

ひさかた

やまの

ろの

この

うつ

たかせぶ

のたまはするが

月もく

水もの

水もの

月この

水に

うつつ

さほの

さす

世佛阿神謂
 因非武夫
 知大事何
 忠之大勇
 總是大人
 大敬之信
 田村將軍
 禮觀音軍
 楠廷尉信
 毘沙門信
 豈不足為
 萬世武人
 之鑑耶

父の上の
 あがむねの
 きよければ
 あままたで
 あらはれて
 やりなん
 さなりけり
 あるひと日
 ゆるしえて

病をいのる
 心の水い
 感應終に
 道交こに
 利益の影は
 うつりやこなん
 さなりくど
 五朗は父の
 いでたつ家は

一、琢句彫字、
 一語不忽。

一條の國の
 津の國の
 ゆふだすき
 えぶのみれ
 清水のの
 三條の
 一條の
 一、條の
 五、條の
 阪

ひとすみちの
 みすぢにおつる
 れとはの瀧に
 心きよめて
 かけしねがひを
 か、け、し、ね、が、ひ、を
 あまのたくなは
 あまのたくなは
 いのりく、て
 くだるれりしも

大詔煥發
時來矣
骨鳴肉躍。

眞葛原
もろびとの
見しわれは
うちいで
ながむれば
かげまくも
すべらぎの
たゝかひを
みとばを

號外の
我はしも
きもあがり
そく太刀を
あが家を
ときしあれ
しるしに
なみうちて
あなあやし

せみなくあたり
つとひさあぐを
うちでのほまの
なにもなにど
こはそもいか
あやにかしこ
やすみしらす
のらせたまひ
かきつめたりし

ふみにこそあれ
かくとみるより
こゝろれどりて
かたくにぎりて
さしてぞ走る
いかなるとの
忽ちむねの
こゝろばしるぞ
あやしくと

讀來、
涼之氣滿
紙。

め、う、つ、
か、へ、る、こ、ろ、
山、の、端、に、
か、ね、ひ、
夏、も、な、ほ、
所、は、づ、れ、
あ、が、や、に、は、
か、よ、ふ、に、
れ、と、は、し、て、

ひ、た、ば、し、り、
は、日、は、に、
入、相、告、げ、て、
ひ、ぐ、ら、し、な、き、て、
す、ゑ、の、に、ち、か、き、
松、の、と、び、ら、の、
は、や、秋、風、の、
萩、の、は、そ、よ、
と、ぼ、そ、た、け、

突如慘景、
呆然愕然。

父、上、の、
こ、は、父、の、
ゆゑ、に、
た、ご、り、い、り、
れ、が、ま、ん、と、
お、く、の、間、を、
こ、は、い、か、に、
海、と、な、り、
舟、と、な、り、

い、ら、へ、だ、に、な、
ね、ぶ、ら、せ、玉、ふ、
う、ら、す、た、ひ、
こ、と、な、き、お、も、あ、
と、も、し、び、か、
あ、け、て、み、
床、は、血、沙、の、
枕、う、か、び、て、
か、な、し、
父、は、

形容雖如
失誇張、
而實景歷
々如見、
何等大手
腕。

佛陀無靈、
神明不感、
人至此境、

豈誰莫此
怨耶。

そのなか
このさま
魂の根さへは
齒の根さへは
ゆめなるか
まぼろしか
この最期
その自盡
かゝれとて
かゝあれと
感應も
道交も
かくと
それと
いのらぬを
いまましの
さりながら
あれからと

たのよひ玉ふ
心もきえて
身にさへそはす
あそぬばかりぞ
ゆめにあらす
まぼろしならぬ
父もきこえぬ
かみもほとけも
たがいのりぞ
たがたのみぞ
いつはりごとよ
そらごとなるよ
しりせばわれは
さとらば我は
いでゆかざるを
神よ佛よ
藻にすむむの
いのちよに

情思窮處、
生惠明。

よもや
よもや

理は

ありその海の

いとふかき

仔細ぞあらん

とばかりよ

なみだをちこち

みさぐれば

机のうへに

長舟の

ゐたなをれきて

ろがろばに

歌ぞありける

そゝがにの

いとうらめしき

かりがねの

ながらのはしの

ながく

かきつらねたる

ふでのあと

かなしかりけり

あさひまばゆきひかりある

さくらの花のにほひある

やまゝと御太刀を汝かかさす

とときころけふはきたりけれ

あなうれしこのいくさ

ひとをころしてひとやすめ

ろの國せめてろのたみを

遺講一段、
峻整峭拔、
卷中最佳處。

起筆正大
森嚴之得
教誠之体。

夏冬褒孝、
春秋勸忠、
句々巧妙、
絶無斧削、
之痕絶佳、
絶佳。

あはれみめづる皇軍は

いさよめむいくさ也

あなたふとこのいくさ

なつはその身を蚊にまかせ

父のまくらをうち扇ぎ

ふちはすまを身にぬくめ

父をこれよとふさしめぬ

秋のもみ **情** のいろよりもの孝也

あなうれしこの孝也

春のさくらのにほひより

かぐばしき名にいさをたて

そはさりながらあだのくび

あなたうれし牙の忠也

どりのはやしにむかふとき

雨ふる鏡丸のなかに汝が

あなれ川をわたるをり

あなはれ汝が心

古詩曰、
雪滿衣裳

水満鬢、曉隨飛將、伐單于、平生意氣、今何在、把得家書、淚似珠、此情誰、免况於、多血感、之日武、士乎。

思國思兒、爲公爲私、大猛然大、決斷。

千古絶調。

山田のいねのほばかりも
 尾花のすゑの露ほども
 父にこそろをくだきなば
 太刀すぢみだれひけとらん
 ねへば父の世にあるは
 ながいきをいの障なり
 ほだしなりけり父なくば
 なほいさましくたかはん

老のいのちはあさがほの
 露よりもろし其花は
 あさひにしほみそのつゆは
 ゆふべの風にきゆるなり
 いざしなんわれ死なん
 どてもかくてもしぬいのち
 死すべき時にしせざれば
 いにこそまさるはあれど

うらた
そよカ

至慈之父。

い。に。い。へ。び。と。も。を。い。へ。け。る。
い。で。き。ら。ん。わ。が。は。ら。を。
き。こ。え。ぬ。父。と。な。う。ら。み。せ。ろ。
子。ゆ。ゑ。お。わ。れ。ぞ。や。み。に。い。る。
と。く。名。を。あ。げ。て。ち。は。は。を。
外。國。ま。で。に。あ。ら。は。せ。よ。
い。で。き。ら。ん。わ。が。は。ら。を。
か。く。て。忠。孝。ふ。た。つ。と。も。
み。ち。て。め。で。た。き。望。月。の。

至誠之夫。

家。の。ひ。か。り。は。日。の。本。の。
ひ。か。り。と。共。に。か。が。や。か。ん。
あ。な。う。れ。い。其。ひ。か。り。
わ。が。や。く。死。出。の。や。ま。み。ち。も。
三。途。の。川。の。き。い。の。へ。も。
汝。が。い。さ。を。い。の。ひ。か。り。に。て。
や。み。を。て。ら。せ。ば。迷。は。い。お。
あ。な。う。れ。い。其。ひ。か。り。
さ。き。だ。つ。妻。に。と。く。あ。ひ。て。

至忠之臣。

一轉、示
孟光伯鸞
之好緣、
以爲月下
氷人、遙

應後段。

い。ま。か。く。と。し。ら。せ。ん。つ。げ。や。ら。ん。
く。さ。ば。の。か。げ。に。ま。ち。や。せ。ん。
い。ざ。ゆ。か。ん。未。来。へ。
と。こ。よ。の。さ。と。の。く。さ。む。す。び。
な。げ。て。い。く。さ。を。た。す。け。て。い。
む。か。し。の。ひ。と。の。そ。の。あ。と。を。
わ。れ。も。ふ。ま。な。ん。ら。ひ。て。ん。
い。ざ。ゆ。か。ん。後。の。世。へ。

さてぞをはりにいひたかむ
ことこそあれやわれむか
汝がゆくすゑの妻にえと
ちぎりれきてしれとめあり
あゝれとめいまいづこ

氏は春日れやの名は
景之とこそなのりしが
をどめは名をば小櫻と
いふもあはれの花の袖

あゝ春日いまいづら

つくしのなみのさはぎより

みなちりぐになりはてゝ

風のあしたもあめのよも

ひとしれずこそしのびけれ

あなかなしこのわかれ

いまはかたみの長ふねの

つるぎは汝が小櫻と

ながくちぎらむ志るゝにと

一口寶刀、
是階老之、
契是報國、
之章。

景之よりのおくりもの

あなかなしこの劔

指をりみればはたとせの

ながき月日ろへにけらゝ

世にもゝあらは小櫻は

さかりの花のいろならむ

世にあれやことなくて

つきぬえにしのひだち帯

とけずはいつかあふさかや

老夫有甚
情。

ひとめの關もはばからで

これをしてるに名のりあへ

とくあへや障なく

かゝるよゝあることなれど

かねていはぬも汝が爲

學のみちのほかにしも

まよはさどとのれやごゝろ

なうらみろれどろきろ

名にいれひたるそのつるぎ

一結最高

有牽萬牛之氣力

鞆をはらひてそのなかみ

かざし見まもれ水たれん

うちぞふり見よ岩きれん

なはやりそためらひそ

無限感慨

こはいかに
かゝる事より

父上は
はて玉ひいか

親人
はかゝるゆゑより

不覺令齒

筆々生動

有發憤

有痛歎

有慚惶

字々烹鍊

有痛歎

有痛歎

有痛歎

有痛歎

あ、な、あ、な、あ、な、
か、ば、か、り、に、
あ、な、あ、な、
そ、れ、と、だ、に、
告、げ、ま、さ、は、
あ、れ、な、れ、や、
い、さ、を、し、の、
誰、を、か、も、
さ、は、あ、れ、ど、

く、ら、ぶ、れ、は、
さ、は、あ、れ、ど、
た、ぐ、へ、れ、は、
修、羅、の、野、に、
先、駈、の、
意、馬、の、脊、に、
鞭、ま、で、も、
自、か、ら、の、
切、り、ま、し、て、

な、あ、あ、く、も、
は、り、玉、ひ、い、
な、夢、に、だ、も、
告、げ、ま、さ、り、
又、せ、ん、す、べ、も、
長、白、山、に、
駒、を、立、つ、と、も、
よ、ろ、こ、ば、し、な、ん、
父、が、な、さ、け、に、

富、士、が、ね、ひ、く、
父、が、め、ぐ、み、に、
鳴、の、海、あ、さ、し、
れ、く、れ、な、と、り、そ、
功、蹟、た、て、と、
父、は、い、の、ち、の、
與、へ、ま、し、い、よ、
玉、の、緒、を、さ、へ、
君、に、敵、な、す、

低徊無恨。

今、清、水、也、今、は、一、も、
清、水、也、観、世、音、我、に、一、も、
我、に、一、も、大、薩、埵、音、羽、山、
我、に、一、も、い、と、深、き、

く、み、て、知、り、け、り、清、き、心、の、
を、は、り、の、孝、を、と、げ、さ、せ、ん、と、の、
め、ぐ、み、な、り、か、高、き、心、の、
か、ぎ、り、の、忠、を、つ、く、さ、せ、ん、と、の、
な、さ、け、な、り、か、

父、か、く、と、一、も、上、を、
山、の、井、の、か、く、は、か、り、
國、故、に、足、乳、根、の、
日、の、本、の、斬、れ、よ、と、て、
も、ろ、こ、一、の、

え、み、し、を、か、く、も、教、へ、ま、し、く、よ、
民、な、れ、は、こ、そ、親、な、れ、は、こ、そ、
我、が、兒、故、に、は、は、は、
は、て、玉、ひ、け、れ、あ、さ、き、心、は、
知、ら、で、あ、り、あ、く、恨、み、に、た、れ、と、

資性純潔 有少過 則悔居常 不端、譬 之猶、純 素絹、有 小黒點、 其貶品、 其大語、 郎或此、 人媿云、 媚無、非 武人、事 然五郎、 潔之、純 豈莫、悔 恨耶、此 况五郎、 是

敬虔信佛 之暴處非 他之驕將 河之驕將 耶

さるを我れ 露ほども 五逆罪 薪ととも ざるを我れ 總ばかりも 無間業 氷ととも さはあれど

今もなほ 觀世音 重くとも さはあれど 今もなほ 大薩埵 ありとも さはあれど かくとこそ

高き心を 知らで誇り 身はハ熱の もえやいあま 清き心を 知らで恨み 身はハ寒の むすびやせま 慈眼視衆生

空しからずは あはれこの罪 見のがしたべ 無垢清浄光 照り透らば あはれこの業 たりし玉へや くらりむねも ねもひかへて

全幅大精
神寫來
彩字句有光

右○此○ろ○こ○親○い○鳴○名○石
の○の○れ○れ○の○と○の○に○疊
道○ろ○こ○名○高○の○し○む
足○を○れ○れ○を○き○海○ふ○む

左○ふ○限○終○輝○い○ふ○富○岩
の○み○の○の○か○さ○を○か○士○も
行○の○の○し○し○を○し○め○の○な
足○か○忠○孝○な○立○て○み○芝○に
に○ん○よ○よ○ん○ゝ○に○山○か

自與前段
照應

數○壁○輕○戰○日○ひ○白○今○御
多○立○ふ○は○本○か○真○は○佛
さ○て○か○は○太○ね○方○も○を
る○き○ば○刀○ば○方○も○を

濱○城○岩○誰○打○思○父○は○仰
の○も○黒○れ○ち○の○に○れ○き
真○な○が○は○ふ○の○に○て○ま
砂○に○が○む○り○の○に○こ○つ
の○は○の○は○り○り○儘○心○ろ○知○れ
の○は○の○ん○て○に○の○れ○ば

回想小評
之處、應
前卷之跡、
伏後卷之
事、舒事、
甚精妙。

い、で、早、く、
ま、ぐ、さ、か、ひ、
水、か、は、ん、
い、ざ、や、と、く、
我、駒、は、
い、ら、雲、の、
今、は、は、や、
鳴、く、聲、の、
さ、は、あ、れ、ど、

小、櫻、が
小、車、の、
春、の、夜、に、
さ、と、り、け、ん、
か、は、り、し、を、
其、の、風、情、
舉、動、と、
我、か、心、
あ、ら、ね、ど、も、

八十四
鶏、の、林、に、
あ、れ、な、れ、川、
時、は、い、つ、ろ、も、
仰、^{あ、い、せ}、さ、が、れ、や、
ろ、れ、と、し、り、て、か、
旗、手、に、向、ひ、
れ、ろ、し、と、ば、か、り、
聞、ゆ、な、り、け、り、
唯、き、こ、え、ぬ、は、

繼、母、に、こ、ろ、あ、れ、
め、ぐ、り、あ、ひ、て、し、
な、の、る、に、ろ、れ、と、
た、も、あ、の、色、さ、へ、
あ、ざ、と、か、く、し、
い、と、あ、や、し、の、
い、ぶ、が、り、に、け、り、
い、ぶ、き、の、山、に、
野、べ、の、螢、に、

俊才、於
是、遂、露、本、
色、亦、可、
憐、之、甚、者、。

あ、ら、ら、れ、ど、も、
我、は、し、も、
さ、し、も、ぐ、さ、
も、や、し、け、れ、
こ、が、れ、け、れ、
親、の、
常、陸、帯、
路、あ、ら、ば、
橋、あ、ら、ば、

以、一、喜、
憂、始、喜、
一、憂、一、喜、
終、一、喜、

逢、ふ、時、の、
此、の、御、太、刀、
い、ぎ、や、い、ぎ、
ぬ、く、時、
出、で、し、紙、
こ、は、い、か、に、
辭、令、な、り、
う、れ、し、さ、は、
久、方、の、

其、夜、よ、り、こ、ろ、
小、櫻、故、に、
空、し、く、む、ね、を、
は、か、な、き、戀、に、
こ、が、れ、し、も、む、べ、
結、び、れ、き、て、し、
戀、な、く、さ、し、
思、ひ、深、め、川、
ふ、み、渡、り、て、ぞ、

い、る、し、な、り、け、る、
鞆、を、は、ら、ひ、て、
あ、ら、た、め、見、ん、と、
な、か、み、と、共、に、
な、に、ろ、と、見、れ、ば、
非、常、召、集、の、
こ、を、み、し、我、の、
い、か、に、あ、り、し、か、
空、に、も、の、ほ、る、

心地せしかな

夏卷全幅、純是桂俊才半生之閱歷、其勵精苦學、其孝順篤行、其亡父痛歎、其感激憤發、其從軍出征、喜憂纏絡、吉凶瑅環之處、參以綠陰烟雨之淡景、落筆自在、揮洒洵極精妙、世態命運、轉變無限之事、一々寫得、紙上自有雲烟波瀾之奇、其如看病遺誠兩段、盡國之赤志、奉親之至情、愴惻之語與壯大之氣、錯綜激觸、粲々淙々、不啻文勢氣格之高邁峭拔、益世道人心實亦有大者也、讀來自覺一片爽涼之意氣滿胸焉、若夫句法章法之整、造構布置之巧、讀者宜自會心、默契又何故諛評以畫蛇足龜毛耶。

五月十八日

淺草橋居燈下拜批



蔓草滿階、陰虫切々、沙鷗悲鳴、缺月影微、何等寂寞、蕭條。

あなさびい、月落ちて、あなかな、なみうちて、ハ重葎

絶影島に、影かすかなり、釜山の浦に、千鳥なくなり、いけれるみぎり

秋カ

紅閨紗窓、
惆悵痛歎、
其人可想。

愁容如見。

露、秋、霧、夜、旅、燈、山、い、か、
か、へ、も、せ、で、の、の、の、の、の、の、
か、へ、も、せ、で、の、の、の、の、の、の、
か、へ、も、せ、で、の、の、の、の、の、の、

こ、ほ、ろ、ぎ、す、だ、ぎ、
お、ふ、る、み、ち、も、せ、
あ、き、風、さ、あ、ぐ、
何、を、し、の、ぶ、か、
何、を、れ、も、ふ、か、
影、う、す、れ、て、も、
鐘、ひ、び、き、て、も、
よ、る、の、こ、ろ、も、に、
な、み、だ、の、あ、め、に、

秋カ
トスレ
る、る、る

敢、不、言、雨、
中、海、棠、
露、下、薔、薇、
惆、悵、凄、艶、
之、中、種、目、
有、一、種、凜、
々、之、姿、
々、者、之、形、
刻、思、之、所、
不、可、不、味、

ふ、り、ろ、で、の、
小、の、櫻、の、
其、の、風、情、
秋、の、露、
玉、篠、の、
あ、だ、さ、く、ら、
知、り、そ、め、て、
な、げ、く、ら、ん、
か、こ、つ、ら、ん、

花、の、す、が、た、の、
お、も、ひ、ほ、れ、る、
手、を、ら、ば、れ、ち、ん、
拾、は、き、え、ん、
霰、よ、り、な、ほ、
う、き、世、の、か、ぜ、を、
う、た、て、き、よ、と、や、
う、れ、た、き、よ、と、や、
と、は、す、が、た、り、の、

繳繞纏縛
縷然痛怨
之所、眞
寫玉人愁
苦之態。

自不直寫、
却令嬌唇
語烈士之
事、虛寫

法之上乘。

意到筆隨。

父○撫○繼^は唐○彼○此○れ○ふ○ひ
上○子○母○草○の○の○く○る○ど
の○也○の○也○に○に○は○は○と
か○御身こそはろ
大○君に
い○ま○も○な○ほ
ひ○の○も○と○に
い○ま○も○な○ほ
あ○る○と○と○き○は
ふ○た○と○せ○を
あ○る○を○り○は

心○こ○心○ろ○唐○大○あ○あ○か
ぞ○れ○に○に○れ○草○和○け○け○た
う○似○か○似○れ○ね○撫○か○ら○い
れ○ま○へ○ま○ふ○ぬ○ぬ○で
る○せ○で○る○れ○子○を○を○け
れ○る○で○る○れ○子○を○を○り
衰へませれ
老いたまひけれ
たつるみさをは
をいかりけり
つくすこころは
若くありけり
東萊の市に
れくりたまひつ
義州のきとに

情愈深、
文愈緊。

今[○]う[○]よ[○]波[○]岩[○]敵[○]敵[○]い[○]父[○]
頃[○]ち[○]ぢ[○]の[○]か[○]が[○]の[○]の[○]た[○]上[○]
は[○]ぎ[○]り[○]の[○]の[○]ね[○]の[○]さ[○]ひ[○]て[○]は[○]

た[○]と[○]か[○]な[○]水[○]其[○]い[○]其[○]い[○]
ま[○]む[○]く[○]に[○]の[○]の[○]の[○]の[○]つ[○]
へ[○]か[○]ろ[○]の[○]上[○]御[○]た[○]の[○]草[○]と[○]
れ[○]り[○]あ[○]し[○]も[○]足[○]さ[○]も[○]鞋[○]せ[○]
ば[○]に[○]る[○]ろ[○]も[○]も[○]を[○]

虎[○]架[○]縫[○]あ[○]こ[○]い[○]い[○]い[○]我[○]
の[○]一[○]一[○]ら[○]ご[○]か[○]か[○]で[○]が[○]
穴[○]あ[○]た[○]な[○]一[○]に[○]に[○]ま[○]皇[○]
に[○]り[○]り[○]が[○]き[○]あ[○]あ[○]し[○]に[○]軍[○]
と[○]つ[○]つ[○]も[○]も[○]ら[○]ん[○]ん[○]け[○]に[○]

遂[○]つ[○]い[○]く[○]渡[○]大[○]ふ[○]長[○]暮[○]
に[○]ば[○]か[○]れ[○]ら[○]同[○]み[○]白[○]ら[○]
め[○]ら[○]ろ[○]の[○]ひ[○]江[○]な[○]山[○]た[○]
さ[○]に[○]あ[○]ど[○]ま[○]の[○]の[○]ま[○]ひ[○]
れ[○]ろ[○]り[○]り[○]て[○]は[○]て[○]の[○]の[○]ひ[○]
て[○]い[○]る[○]は[○]て[○]の[○]の[○]て[○]

不覺潜々
涙下

今頃には
宿りゝて
かぐろひて
かゝりてぞ
若やもい
つゆとのみ
夜半の風
いかにばかり

一轉下警
快語、甚痛

朝の霜
いかにばかり
こをねもひ
なかくに
はりつたふ
あるもの
さゝあくる
あるものを
もろこしの

伏猪の床に
ねはしますら
おはしますら
敵の繩に
ねはしはせぬか
敵のやいばの
きえおはせぬか
老の御身に
いみじくも
いかにばかり

老の御身に
こたへやすらん
かれをいのべは
かなしかりけり
鼠も道の
繼母にはな
蛇あうちも道の
繼母にはな
人にしあれど

鄙陋貪婪
之毒婦、

虐淑德貞
婉之孝女、
古來往々
有之尤是
人間悲慘
之事。

其の庭は
敵國の
其の家は
川のごと
山のごと
花にれき
月にゑひ
れはせれば
いたがひて

山吹にほひ
人にあれど
菜の花ひらき
黄金をたへ
財寶をつみて
花にねぶりつ
月に歌ひて
繼母がこばに
いざ其のひとに

手をられて
とくくと
叱るごと
ほゝゑみつ
きのふけふ
妾をむ
故郷に
此の浦に
またもまた

花のいたむも
身をまかぬと
すかすがごと
れもあゝかめつ
ろばもはなれて
せめ玉ひけり
ありに一時も
さすらひきても
ひとたびならず

深回曲柄、
反覆說出、
文情双奇。

野外萩花、
嫋々拂露、
向悲風、
湘竹凜々、
凌霜對寒、
月、霜之概。

^{カスミ} 婦道之大
綱、女徳、
之本、領、
之、々、
字、々、
皆、莫、不、
儀、貞、操、
寶、鑑、之、
世、道、人、
實、尤、大、
尤、厚、者、
僕、願、以、
誦、之、也、
小、妹、也、

ふたゝびも
繼母上も
ちはやふる
生れかもの
たまほこの
ひとにかも
ひとならぬ
いまゝい
くちをい

あまつ日は
かはらざる
かかげは
月影は
かほらる
此の道
其の道
もの
もの
も
女
郎
花

かくぞのたまふ
れもへばうたて
かみのみくにの
れもへばかな
道あるくりに
あるよとみれ
此のみ言葉ぞ
其のみすゝめぞ
極みなりけり

よこのほるとも
女の道の
よこのほるとも
操の道
ほかはふま
とろはたさ
ながれす
やまど
なよくは
女

一急一緩、
嘈々切々、
事之悲、
文之妙。

みゆれども
すきびとの
くろがねの
姫小松
みゆれども
あだびとの
むすこけの
されば身は
うくるとも

されば身は
きゆるとも
あなや父
かくばかり
かくばかり
繼母上は
あなや父
かくまでに
うきしづみ

こゝろの花は
露にぬれ
鐵よりかた
あだくしは
操のいろは
霜にもかへ
岩よりかた
呵責の数を
こはうけひか

しもとのつゆと
こはききいれど
家にしまさば
ありなきとを
みちなきとを
のたまはさどに
家にに妻の
あまのうけな
おもひわづらひ

水、泉、冷、澁、
 絃、凝、絶、
 凝、絶、不、通、
 聲、纔、止、
 時、有、幽、愁、
 暗、恨、生、
 此、時、有、聲、
 又、無、聲、
 此、詩、以、可、
 評、此、句、也、

あ、る、と、し、も、
 夢、の、橋、
 通、へ、ど、も、
 身、に、翼、
 な、が、め、て、も、
 と、や、し、な、ん、
 と、つ、お、ひ、つ、
 秋、の、夜、も、
 い、の、よ、め、の、

い、ら、で、お、は、さ、ん、
 か、け、て、い、く、夜、か、
 告、げ、ん、す、べ、な、し、
 な、き、て、み、ろ、ら、を、
 行、か、む、す、べ、な、し、
 か、く、や、な、し、な、ん、
 お、も、ひ、あ、か、し、て、
 は、や、し、ら、み、お、く、
 み、空、に、あ、は、れ、

蟬、蛾、忽、昂、
 雲、鬢、頓、拂、
 惆、悵、之、容、
 倏、爲、悲、憤、
 之、態、小、櫻、
 所、是、小、櫻、

ひ、と、む、ら、の、
 折、し、あ、れ、
 郵、便、と、
 時、し、あ、れ、
 お、き、い、で、
 も、し、ほ、ぐ、さ、
 氏、と、名、を、
 玉、章、に、
 か、た、い、と、の、

雁、な、ぎ、あ、た、る、
 門、の、あ、た、り、に、
 よ、ぶ、聲、き、あ、ゆ、
 い、そ、ぎ、小、櫻、
 つ、ま、ご、あ、く、れ、ば、
 聯、隊、長、の、
 か、き、し、る、し、た、る、
 そ、れ、と、み、る、め、も、
 い、と、ね、ど、ろ、き、し、

本○色○深○味○讀
 者○來○數○齣
 前○來○誦○此
 來○則○卷
 句○佳○人○容
 中○玉○顏○花
 歷○々○然○相
 興○卿○等
 接○六○寫○奴
 浪○一○萬○處○角
 同○悠○然○収○來
 自○有○餘○情

けはひにて
 讀みていか
 青柳の
 烏羽玉の
 身をふるひ
 くやいげに
 おもわにて
 伏しにしが
 つとたちて

しばしがほは
 いかにかいけむ
 眉をきかだて
 鬢をみだして
 たもとをひぢて
 くちをいげなる
 暫時がほは
 なにおもひけむ
 すろをからげつ

太刀はきつ

ひたばりて

慕○然
 其○の○と○き○し
 雁○の○聲
 釜○山○浦○か
 其○の○を○り○を
 ふ○り○ぞ○し○き○れ○る

家○を○い○で○け○る
 ま○た○な○き○渡○る
 絶○影○島○か
 ふ○り○さ○け○み○れ○ば
 ひ○と○む○ら○ききめ○は



蟲○す○た○た○ぐ

野○べ○し○盡○れ○ば

よまゝ
その
結

大匆忙中、
挿此二句、
鈎接旋轉、
何筆神韻、
何等妙筆。

從容提起
場中主人
公來、主
無些難澁
艱苦、老
筆

ハ、夕、あ、松、乗、見、木、
騎、霜、の、の、の、夕、
兵、の、て、の、の、の、の、
の、の、の、の、の、の、の、

小、よ、岩、一、い、い、乗、乗、敵、
手、ぢ、が、士、ざ、で、る、る、の、
か、の、ね、官、こ、そ、馬、駒、陣、
ざ、ほ、の、の、の、の、の、の、
い、り、の、の、の、の、の、の、

を、ね、敵、ま、ま、手、心、
へ、か、い、く、よ、川、よ、
か、い、く、よ、川、よ、川、
こ、み、薄、を、を、を、を、
を、を、を、を、を、を、を、

な、敵、こ、を、森、丘、鎧、枚、こ、
が、也、ご、し、に、に、を、を、
め、い、し、ひ、の、の、を、を、
あ、か、き、ろ、ほ、ろ、ふ、
た、に、路、め、ら、づ、く、
せ、と、を、と、と、む、め、ま、
り、と、を、と、と、む、め、ま、

宋人有詩、曰、朔漠風高、艸木枯、桓々騎士、列前驅、夜歸雪滿、弓刀白、羌笛一聲、山月孤、雖雄峻、絕未及、此扁之妙。

文勢小緩、弛處中、有大趣味、不覺令人泣然。

筆鋒甚急、不遑應接。

風、に、ち、る、
 月、に、吹、ゆ、る、
 敵、と、い、ふ、
 た、い、し、ば、し、
 や、す、め、む、せ、
 し、か、す、が、に、
 九、騎、の、武、者、
 草、の、
 岩、の、
 床、枕、

た、ご、る、ら、ん、
 父、母、か、
 妻、こ、ふ、る、
 驛、路、の、
 つ、ま、さ、れ、て、
 腸、を、
 忽、に、
 関、の、
 忽、に、
 聲、に、

木、の、葉、の、外、は、
 虎、の、ほ、か、に、を、
 敵、こ、そ、み、え、ね、
 ひ、る、の、疲、勞、を、
 い、ひ、あ、ま、さ、ね、ご、
 弱、り、は、て、た、る、
 木、の、下、陰、に、
 征、衣、か、た、い、く、
 夢、や、い、づ、く、を、

大、君、の、へ、か、
 友、よ、ぶ、ま、し、ら、
 小、鹿、の、聲、に、
 す、ゞ、ろ、其、身、に、
 益、荒、武、雄、も、
 た、ち、や、し、ぬ、ら、む、
 は、げ、し、く、れ、こ、る、
 さ、て、こ、ろ、き、つ、れ、
 ひ、ゞ、き、ぞ、あ、た、る、

流星掣電、
雷擊雲擾、
劍光砲烟、
紛々雜々、
一內飛骨散、
大血戰、

之々光景得、
細々寫得、
叫喚突衝、
宛然在前、
謂國文不、
寫得雄壯、
之景者、
宜三讀此、
文也、

銃の音、
殺字軍か、
親軍か、
神州の、
とく待ちて、
九騎の武者、
日本太刀、
日一本、
慕然、
真一も、

雲をなす、
霞をなす、
手負猪の、
荒熊の、
右に馳せ、
前に衝き、
縦横に、
陰に閉ち、
切りに結ぶ、

さてはよせたり、
練兵盛字、
いざちかよれ、
益荒武雄、
こゝにぞあると、
纏をあらへ、
切先を、
たけり、
くひに狂るひ、

敵のたゞなにか、
えみいのうち、
あれしがごとくに、
いかりがごとくに、
左にかけり、
後を破り、
无^{かぎりもし}盡、
陽にひらき、
一上、
一、
下、

所謂、短、
巷急兵相、
接處、殺、
人如艸不、
聞聲者。

日、の、御、旗、
龍、の、旗、
我、が、駒、の、
去、が、か、ば、ね、
我、が、太、刀、の、
し、が、血、し、ほ、
え、み、し、等、ば、
さ、は、あ、れ、ど、
う、ら、み、や、る、

い、か、で、ま、い、べ、き、
い、か、で、か、ち、え、ん、
蹄、の、塵、の、
岡、山、を、な、し、
鏑、の、な、ご、れ、の、
小、川、を、な、し、て、
は、や、に、げ、に、け、り、
み、か、た、い、か、に、と、
此、處、に、彼、處、に、

斬、り、は、ふ、る、
い、な、づ、ま、と、
い、か、づ、ち、と、
う、ち、は、な、つ、
五、月、雨、の、
立、ち、あ、が、る、
黒、雲、の、
敵、味、方、の、
た、い、し、ば、い、

虚、マ、實、々、
ひ、ら、め、き、あ、た、れ、
さ、よ、め、き、あ、た、れ、
銃、丸、は、ふ、り、て、
篠、つ、く、ご、と、く、
硝、煙、は、み、ち、て、
れ、り、あ、る、ご、と、
入、り、亂、れ、て、る、
戦、ひ、し、か、さ、

カ
リ
リ
リ
リ

筆雄氣満、
悲壯激烈。

ながめやる

此のもかのもに

我が武者は

ふかでのまゝの

其の腹を

我とかききり

あるはまた

ておひのまゝの

其の胸を

我とさしけり

あはれその

銃丸も盡きしか

あはれこの

太刀もをれしか

退かば

ゆみやのはぢぞ

進まんか

ふかでぞつらし

敵の將

斬りはふりけり

我事は

はやをはりたり

敵の旗

奪ひつさげにけり

我事は

はや止みにけり

とばかりに

おもひきめてや

これまでと

ねもひすてゝや

をゝしくも

はたけなげにも

かくころは

いのちしにか

唯 獨

とりのこされし

語々沈痛、
文文山口
吻。

我もまた
 ねもへども
 かへりごと
 我身とて
 命とて
 いざや我れ
 いざや我れ
 一士官
 はやれども
 我もまた
 今日の斥候つこの
 なしをはらねば
 我まゝならど
 我ものならど
 復命かへりごとせむ
 立ちかへらむと
 いとゝ矢竹に
 ふかきいたでに

たちもえで
 なやせをり
 何地より
 何處より
 えみしらは
 敵武者は
 其の太刀は
 其の鎗は
 今にしも
 ねきもあがらで
 くるしむときし
 馳せきたりしか
 いできたりしか
 俄に圍み
 忽ち抜きて
 ふすまを作り
 林をつらね
 きりぞいらむと

更弾一曲、
 妙手不覺
 煩。

叙戰兩回、
 絶無同一
 筆法、可
 見、作者
 筆路暢達。

見えければ
今にしも
かまへれば
ありしかど
梓 弓
ひきかへて
それのみか
つなでなを
ひきかへて

すきをもみせず
つきがいらおと
我もみがまへ
を~~あ~~もへばかなし
あまたの敵に
味方はひとり
おもへばつらし
あらての敵に
味方はてれひ

三の面おもむの

よしや我れ
ありぬとも
よしや我れ
ありぬとも
けふといふ
我がいのち
いまといふ
我が武運ぶうん
さはあれど

いまなにかせん
六のかひなの
いまなよかせむ
けふおそあはれ
をはりはつらめ
いまこそあはれ
つきがはつらし
青あざ蠅はへなす敵

なにほごの
 けがらしき
 なにほごの
 敷島の
 あらはすは
 神州の
 いらするは
 ぬぎやいぎ
 我よりや
 ことやあるべき
 豚をえみし
 ことやあるべき
 大和心を
 かゝるをりなり
 ますらたけ男を
 かゝるときなり
 時こそきつれ
 衝きぞいらむき

奮戦苦闘、
 細徵寫出、
 而不失文、
 勢之勁、
 圓熟之筆。

大凶徵。

いでやいで
 我よりや
 長ふねの
 えみし等の
 斬りれと
 なほもまた
 こはいかに
 我が太刀は
 そもいかに
 折こそよぢれ
 斬りぞいらむと
 太刀うちふりて
 よりくるみたり
 ちかよるふたり
 衝かんとせしに
 あなくちをしや
 忽ちをれぬ
 あないまゝしや

危機一髮、
死乎生乎。

我、が、太、刀、は、
か、く、と、み、
い、よ、く、
ろ、れ、と、み、
ま、す、く、
あ、は、は、れ、
あ、は、は、れ、
淡、雪、の、

急々促々、
雷光石火、
未足譬。

迅疾輕捷、
如鷺鳥搏、
雀。

一、瞬、間、
一、瞬、間、
慕、然、
真、一、文、字、
右、左、
斬、り、
前、後、
打、ち、
腥、き、

俄、に、を、れ、ぬ、
敵、の、太、刀、風、
は、げ、く、な、り、ぬ、
敵、の、切、先、
す、る、く、な、り、ぬ、
風、の、前、な、る、
我、が、命、な、り、
朝、日、に、む、か、ふ、
我、が、身、な、り、
我、が、身、な、り、

此、の、時、は、
其、の、時、れ、
一、き、り、に、は、
一、き、り、に、は、
は、せ、に、は、せ、
む、ら、が、る、あ、だ、
蹴、ら、は、ら、
つ、と、へ、る、え、み、
う、ち、や、ぶ、り、
屍、の、山、も、

疑路纏繞、
欲說容易、
不說容易、
何說入者、
甚弄之。

そ、も、あ、れ、を、
み、さ、ぐ、れ、ど、
秋、の、空、
高、麗、の、原、
う、ば、玉、の、
と、ま、る、も、
其、の、ひ、ど、に、
か、へ、る、に、も、

ふ、み、し、た、ぎ、
く、れ、な、お、の、
こ、え、あ、た、り、
か、あ、は、ど、ど、
か、ち、え、ど、
え、み、し、等、は、
敵、武、者、は、
そ、も、あ、れ、を、
誰、な、ら、む、

す、く、ひ、し、
此、處、と、彼、處、と、
定、め、な、き、よ、の、
又、時、す、き、て、
あ、や、め、も、あ、か、ぬ、
闇、と、こ、そ、な、れ、
た、す、け、を、う、け、し、
あ、ひ、も、あ、た、は、を、
も、そ、や、か、な、は、し、

戦、血、ひ、
戦、ひ、に、け、り、
血、の、川、も、
戦、ふ、ま、よ、に、
れ、も、ひ、や、け、む、
れ、そ、れ、や、し、け、む、
亦、に、げ、け、ら、ら、
復、う、せ、け、ら、ら、
さ、す、け、し、人、や、
神、か、ほ、と、け、か、

歎○仰○天○大○痛

曇○華○浮○木○
大○奇○遇○

サ
イ
カ
ア

主○人○得○意
之○筆○

此○の○傷○に○
 い○ぎ○や○世○は○
 い○ま○や○我○れ○
 す○る○と○き○一○
 人○あ○り○て○
 我○が○も○ろ○手○
 こ○は○誰○と○
 望○月○の○
 小○櫻○の○
 さ○ぎ○く○や○と○
 な○つ○か○一○と○
 諸○共○に○
 増○鏡○
 こ○の○時○一○
 雲○は○れ○て○
 此○の○を○り○し○
 さ○に○あ○た○り○
 蟲○も○な○死○け○
 る

足○ぞ○た○ち○ろ○ぐ○
 是○迄○な○り○と○
 腹○を○き○ら○ん○と○
 忽○ち○そ○ば○に○
 一○ば○し○い○ひ○て○
 に○ぎ○る○を○り○も○
 み○や○る○と○き○一○
 ぬ○一○に○ま○世○一○
 君○に○あ○り○一○か○
 か○も○ふ○か○た○り○つ○
 と○も○ふ○か○た○り○つ○
 う○れ○し○な○み○だ○の○
 か○き○く○も○れ○ど○も○
 俄○に○そ○ら○は○
 心○あ○り○げ○の○
 忽○ち○空○は○
 れ○な○ぐ○れ○も○ひ○に○

百三十一

百三十一



浩詰之佳、
關鎖之巧。

やまとのみ つもりつもれる
 憂きばなし おはかにかくに
 うみとのみ たまりたまれる
 物 語 ろそあとにして
 いざやまづ れちのびたまへ
 いでやとく のがさせたべと

勸
力

小 櫻 の 勤 むる 肩に
 望 月 は す がりたちてぞ
 たごくと 草葉を分けて
 せぼくと 野路をたどりて
 杉くらしき 山のかけちや
 薦あかぎ ^き 谷の 下道
 をれまがり まがりくとて
 ゆきあゆみ あゆみくとて
 行くほとよ 家もあるら

山家秋夜
之趣、描
出入神

行くかたに
木の間に
燈火は
山は
あなうれし
やせりして
あなうれし
ながさめつ

庵もあるら
かまかに
みえがくれ
いづかに
そこえあ
ろこにこよ
語りかは
そこにて
やすらは

道義之至
高者、莫
如捨已施
人、薩埵
投夜叉、
鹿王死羅
閣、大聖
之偉跡、
萬古有鑑

あゆみより
隙間より
我れみれば
我れきけば
逃ぐるにも
いかせむ
遁るにも
いかせむ
いさびと

崩れ壁の
破れ垣間
みるもあは
きくもあは
初生のこの
かなしきこ
やめる其の
うれたたき
寄せてやこ

今讀此扁、大感君之、德音厚、後數日閱、新紙偵察、大尉方、之次事、有此事、大尉主、人人學主、歎、描、人、真情不、自相會、實有如斯。

今、に、し、も、
 と、や、い、な、ん、
 と、は、か、り、に、
 き、の、ふ、け、ふ、
 初、生、の、兒、を、
 い、だ、く、な、る、
 よ、り、ろ、へ、る、
 柴、今、の、戸、を、
 我、れ、

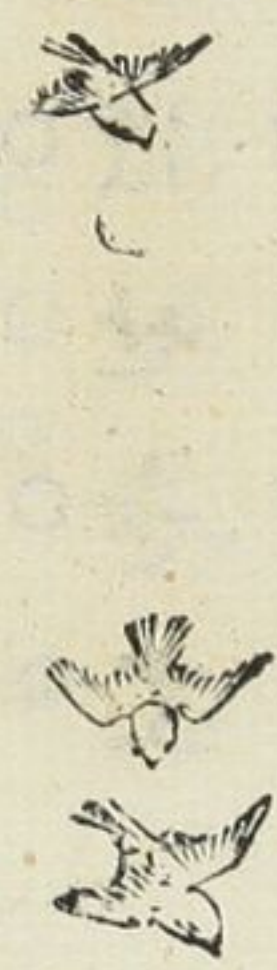
い、か、は、か、り、
 い、か、は、か、り、
 の、ほ、せ、き、て、
 さ、て、こ、ろ、は、
 さ、ど、ろ、き、て、
 お、ど、ろ、き、て、
 身、の、痛、手、
 心、ま、し、は、し、
 よ、ろ、を、し、も、

此、處、に、き、た、ら、は、
 か、く、や、な、い、な、ん、
 涙、に、く、れ、て、
 産、み、れ、と、い、か、
 病、の、床、に、
 女、が、ろ、ば、に、
 老、媪、な、り、け、り、
 こ、の、征、衣、に、て、
 た、た、き、い、り、な、は、

れ、ど、ろ、き、せ、ん、
 逆、上、せ、る、ら、ん、
 病、の、死、ぬ、ら、め、
 い、の、ち、死、ぬ、ら、め、
 親、乃、老、媪、は、
 目、も、く、る、め、か、め、
 足、の、な、づ、み、も、
 一、の、び、く、て、
 た、づ、ね、や、み、な、ん、

枯荷杯葦、
雙鴛夢冷、
香殘花落、
兩峽失棲、
薄命之中、
自命之慰、
之意。

ほかをしも
小櫻と
望月は
なほまた
分けいりぬ
めざしくらむ



今はしも
れはすぞや



痛手はいかに
いたみはせずや

もどめやゆかん
さきあひて
月を杖に
山れくふかく
あはれいづこを

態如鼠、
行如狐、
般的非一
般人。

よべはしも
なりゆくや
おもひに
このやどに
うれしさは
うれしさに
望月の
小櫻の
物語る

二人はいかに
なりはつるや
れもひもかけぬ
やとり一時の
あひみりを
かえらざりしと
春をなでながら
問ひつとはれつ
をりしも壁に

耳あてゝ
誰ならん
他^{あた}人^{ひと}か
いかならん
あらずにか
望月は
小櫻は
花のひ^ひ
こゝかたを

きくなるひとや
宿のあるトか
うおづくさまや
たくみありてか
神ならぬみの
かくともいらす
それともいらす
とけてかたみに
かたりあひけり

躍然驚喜。
之態可^〇想。

さてころは
親れやの
常陸帯
濱千鳥
さてころは
望月の
二見瀉
立つ石の

うれしくもあれ
むすびなかれ
めぐりあひねの
鳴きしかひあり
はづかしくあれ
ぬしと妻と
千代もならびて
動^{のき}ぬ夫^{むこ}に

典雅流麗。

前聯凛然
之志、憐之後
聯、可憐之
情、語々
皆鐫削鍛
煉之餘

愛鍾情窮
處、惻々
動人

まゝにいか
神杉に
祈りしか
ふたもと
ならぶな
いにくら
すれはす
松の。色。

なやまされ
あらふく
女。郎。花。
いらまひそ
口のうち
うすもみぢ
おほふこそ
かくばかり
掬む夫は

月日をふるの
かゝれとてそ
そのかひありて
かくはけふこそ
幾夜の霜に
誘はれこそ
かへぬ操の
あはれとぬし
憂世の露に

今はいろかも
枯野の末の
あはれ見捨な
とばかりいふも
紅らむ顔の
花のたもとを
やさしかりけれ
切なるむねを
かなしがるらん

千創万瘼
之苦痛、
於是何有。

かくばかり
聞く夫は
天ならば
鳥どこそ
地ならば
木どこそ
そはとまれ
かくもあれ
いざやいざ

やきいき言を
うれしかるらん
羽さしかはす
我はれもへれ
枝さしかはす
我は契らめ
我か身の上は
そなたの上を
はやくかたりね

問答二對、
如露氣雨、
聲、自有
氣韻、妙。

いでやいで
小櫻と
望月は
ゆふいほの
しらなみの
問ひにけれ
小櫻は
桐の葉の
涙川

つばらにきかん
ことふ夫の
よべのあふせを
さすがにうれと
揃みかねてこそ
かくと問はれて
秋のゆふべの
ほろくねつる
うれひにいつむ

前、齣、臨、逆、境、々、之、姿、見、凜、々、之、順、境、今、在、順、境、故、唯、嬌、態、耳、唯、嬌、態、者、設、形、容、者、自、有、法、。

ろのさまは
海 棠 の
春 雨 に
なやむなる
春 風 に
船 出 一 つ
あらかなみふ
ゆられつゝ
かぢまくら

春のあゝあゝの
つれく〜とふる
うち〜ほたれて
風情なりけり
花ふるさとを
身をうき〜まの
八重の汐路を
いくよをうみの
かさね〜て

淡々叙來
自有至味。

船 は 一 も
草 ま く ら
妾 は 一 も
あ は れ 父
こ ひ 一 や と
あ は れ 汝
な つ か 一 と
う れ 一 さ は
か な 一 さ に

釜山にはてぬ
むすび〜て
家にがつきぬ
さきくませ〜か
妾 一 い 一 ば
さき〜あり〜か
父ろのたまふ
やがてかはりて
なるとも〜らぬ

是之巾幗
之真情

あふ霄は
別るべき
くちにこそ
めでたしと
むねのうち
血の涙
國の爲
なげくとは
君の爲

やがて移りて
朝とはなりぬ
いくさの門出
みれくりはすれ
別れをしきの
雨とふりけり
いでたゝするを
ありなきことよ
れもむかするを

かこつとは
しかすがに
なかくに
こはなにの
そそなにの
明けぬれば
父上を
暮れぬれば
父上を

道ならじとは
れもひかへても
おもひかへらぬ
故にかあらん
爲にかあらん
又さまは
いかにとれもひ
またよなくに
いかにとしのぶ

流暢之句、
悲酸之事、
筆頭有淚。

至此承前
卷極中筆
闡發卷中
佳人之凜烈
節義之氣

む、よ、む、
べ、も、べ、
な、す、な、
り、が、り、
け、ら、け、
ぬ、の、け、
ぬ、の、け、
ぬ、の、け、
ぬ、の、け、

ひ、あ、玉、れ、柴、あ、砌、し、み、
ね、や、草、ど、の、か、ら、ろ、
も、な、草、づ、の、ね、に、ね、ら、
す、く、れ、戸、ご、ご、に、に、
に、も、に、を、に、も、は、も、は、

か、ろ、か、
ゝ、で、ゝ、
る、か、は、
き、か、か、
ぎ、か、ぬ、
し、ぬ、し、
よ、よ、よ、

涙、の、こ、聯、父、露、雨、雁、そ、
た、せ、ゝ、隊、の、げ、か、な、き、あ、れ、
え、て、ろ、長、か、な、き、草、涙、あ、あ、
ぬ、に、け、の、し、の、の、か、り、ぬ、
も、り、く、の、き、の、か、り、か、

運筆縦横、
一段氣概、
一結不散、
凝結甚高、
風格甚高、

さ○も○草○敵○尋○敵○あ○阿○う○
ぐ○と○分○の○ね○の○ら○修○つ○
り○め○け○の○い○く○駒○羅○鞭○
て○て○け○の○い○く○駒○羅○鞭○
は○は○て○跡○り○び○よ○王○に○

霜○露○こ○高○ろ○と○身○怒○身○
に○に○ゝ○麗○こ○り○は○る○は○
れ○い○や○の○の○の○の○乗○こ○は○
き○ね○か○そ○か○は○せ○ゝ○ま○
つ○つ○こ○り○こ○し○れ○ろ○さ○
ゝ○ゝ○と○原○に○に○て○の○れ○

海枯石爛、
不伐讐不、
止角天涯、
地報怨莫、
不休節義、
之所感義、
鬼神震動、

夜○那○金○我○い○我○い○ま○あ○
又○羅○剛○が○ざ○が○ざ○こ○は○
羅○延○敵○が○や○太○や○ゝ○れ○
刹○の○の○を○い○刀○い○ろ○世○
の○の○を○ざ○を○ざ○の○と○

た○ち○ほ○う○利○守○弓○清○濁○
け○か○ど○た○劍○ら○き○り○
き○ら○を○せ○の○の○せ○矢○に○に○
れ○を○か○た○彌○た○ハ○め○た○
も○こ○た○ま○陀○ま○で○れ○
ひ○め○め○へ○も○へ○幡○ゝ○ど○
の○つ○つ○と○も○へ○幡○ゝ○ど○

柳眉昂然、
 明眸爛焉、
 切皓齒、
 扼纖手、
 佳人悲憤、
 之狀揮洒、
 見真。

破庵
 とばかりに
 あはれと
 其の悲憤
 あはれと
 此の无念
 手をあて
 空しくも
 かみしめて

祭るは神か
 とある野末の
 佛もれほせ
 露ほだに
 かみもれほ
 穂ばかりだに
 今日とあか
 悲憤の柄に
 昨日とくら
 悲憤の柄に

徒一我いけひ我いけ
 太がくふとかねくふ
 刀めそたいくびらた幾
 にもすびよもふび日

无斬敵きいあ敵めい
 念りににりくひにぐく
 のろいははそそのはりそ
 袖いりいへうふせす
 をすだもをすぬだもよ

無事則婉
順貞淑
春花爲其
容節義事
則節義貞
烈節義貞
其心秋作

實神州婦
女之特性
也、古來
閨秀之當
君夫之難
大節殉義
載有青史
指點一々
不可數也
而今也女
流多輕薄
點紛傳紅
濃飾靚盛
裝飾媚艷
是競、平
生既無婉
順貞叔之
德、貞臨事
何有貞烈
節義之事
邪、義之乎

御佛か

ゆふだすき

をりしあれ

関の聲

時しあれ

筒の音

さてはさて

父のあだ

いざやいざ

めぬさきへ

裾をさへ

うば玉の

いなづまの

ゆきみれば

ものゝふは

にみしらに

あやふげに

見かねてぞ

それとわかねど

かけていのれる

かなたの森に

どよめき渡る

こなたの丘に

ひゞきあたりぬ

いくさなるらやし

其處にはゐずや

たづねやみんと

しめしもあるへず

のゝげん間なく

暗を縫ひつゝ

はやくも馳せて

我が皇軍みかみの

かなしやしこの

とりかこまれて

戦ふさまを

女ながらも

可歎哉、
主人描小
櫻、特着
力干其膽
力武披、
蓋有所慨
然邪。

ものゝふの
たけりをの
太刀ぬきて
小櫻の
望月は
さてはしも
我をしも
雄々しくも
けなげにも
ものゝくも
たけくも
斬りいる時と
語るなかばに
口をひらきて
かゝることより
死地のなかより
助けたべいか
救ひくれいか

花月相思、
互添麗加
艶、花謝
日、月負
花、芳契
於是萬年。

此のなさけ
つくしても
其の看護
かゆるとも
小櫻と
望月の
あなやぬ
あなやせこ
春の夜に
世をつくしても
忘るべきかは
身をかゆるとも
忘るべきかは
うれしあみだに
語るをきゝて
何にのたまはす
なにのたまふら
助をうけ

烈女亦有
此痴態如
如怨如訴
這理真情
無限

妾とて

他人ならぬ

秋の夜に

すくひまつり

主とて

他人ならぬ

我が夫に

ましますものを

身は妻に

ありけるものを

いかなれば

今なほかくは

竹垣の

へだて玉ふら

いかなれば

今なほかくも

他人の

言をのたまふ

我が父は

はづかしかれど

やがてまた

主が父なり

我が敵は

かしかれども

やがてまた

夫が敵なり

其の敵の

李洞にあふは

いつならん

せこのいたでの

此の傷の

れこたる時は

いつならん

せめては主の

助太刀を

あふぎて共に

言下有賊、
冷然苦笑、
跳梁踴躍、
奸惡之面、
甚分明。

我が本意を
 詰でなば
 雲霧と
 語るをり
 汝がめざす
 平壤へいじやうに
 我大人に
 我ころは
 汝こそは

とげて靈墓みほかに
 父の怨は
 はるらんものと
 李洞は我が
 仇敵かたきは我ぞ
 春日をうちて
 賞金はまれをうけて
 家にあるなれ
 死地しちにあるなれ

夏蟲の
 燈火の
 いざやいざ
 うけよとの
 いでやいで
 葉もからし
 雲霧と
 曾てより
 聞き居りし

とびきてかゝも
 中にたちしは
 又も賞金はまれを
 天のめぐみか
 其の根もたちて
 後の憂を
 我れはらさんと
 壁にたゝすみ
 くせものかくと

天授神與、
大幸々々、
躍然蹶起、
伐敵處、
宮忍兩娘、
逼團查路、
熊、

圖、刺摩、
刺之、處、
文字飛舞、
筆々生動、

劍光閃々、
電擊星散、
突然打帷、
一聲、
慕急下、
不覺令人、
握拳延頸、
懊惱煩悶、
作者何等、
惡戲、

聲こわ 高たか に

よばはりて

破れ障子せうし

忽に

大太刀を

ふりかざし

中よりは

あるところ

今にころ

鸚鵡がへりに

髪さかだて

蹴くへえはららてぞ

丈にもあまる

目よりも上に

躍り入るとき

さては此の家の

仇敵かたきなりいか

れもひーらせめ

弓矢ハ幡

擁護あらせ

利劍の彌陀も

照覧あれと

聲するとき

ともしびきえて

やみとなりける

打ちあふ太刀の

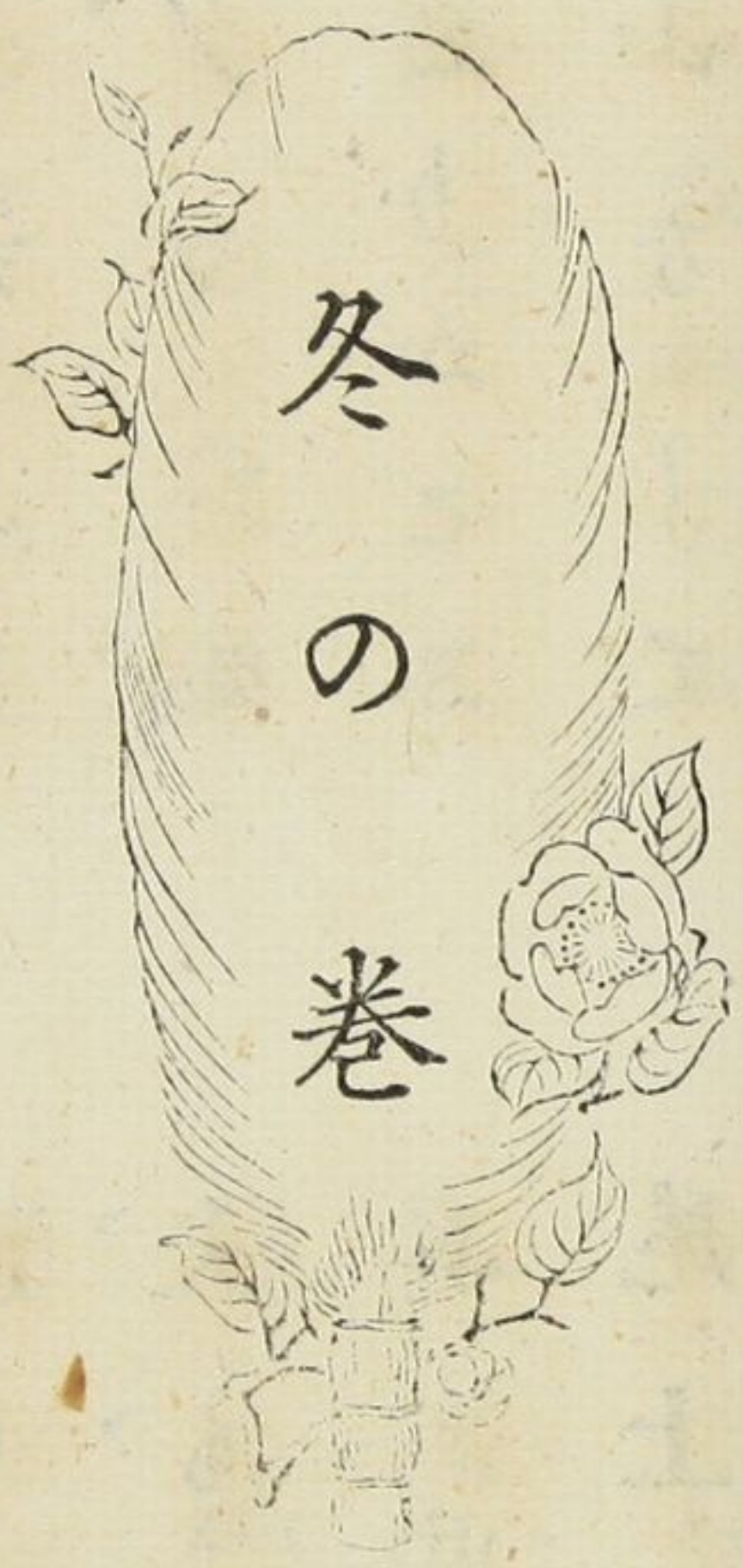
いぎやいぎ
いまあれを
いぎやいぎ
今ころを
小櫻のの
忽に
うば玉の
真夜中に
火花のみ見ゆ

いぎやいぎ
いまあれを
いぎやいぎ
今ころを
小櫻のの
忽に
うば玉の
真夜中に
火花のみ見ゆ

秋卷一篇、扁分三段、一半寫佳人之辛酸、一半描俊才之忠勇、末段從勢結束、點出不測之奇遇、以収局、段々對映、句々回應、命意措辭、雙絕奇絕妙、忽紅閨紗窓、雁啼虫吟、忽銅兵鉄馬、雷轟電擊、忽荒山破驛、鸞約鴛盟、情景悉躍動、神韻皆飛鳴、文勢口調、有整然勻適之處、有參差錯落之所、或速而連、或遲而輕、有凄咽、有壯快、有婉曲、筆墨淋漓、毫無懈怠、真是希世之神品、至如其一氣橫流、義烈貞操之事、纏絡說到、古道奕々照顏色則、別是主人之特技、非他賣文俗流得摸倣所也、綠窓淨几、試朗誦一過、則妙味津々然、冷暖自知已耳焉。

六月一日

環翠樓上拜讀



濃艶豐麗、之天地、一轉為瀟灑、洒淡蕩之、風光寂寥、轉現寂寥、蕭條之境、界此、今方、至翠、紅、閉翠、楓、花散、萬般、舉

ひのたての
つみく
暮れぬれど
さえく
ゆふされど

愛宕れろは
尚ほふたさび
差巖野の雪は
尚ほふりきり
みさぐる極み

景狀總江
山一白之
皚々讀者
深翫索主
人之筆路
也。

奇。黑字點得

叙來如畫。

眞、白、に、て、
ひ、の、ぬ、き、の、
眞、白、に、て、
ろ、が、中、を、
大、堰、川、
ろ、が、上、を、
夕、烟、
と、り、か、こ、ふ、
山、な、し、て、

玉、い、く、ご、と、く、
み、あ、た、ま、を、限、り、
玉、い、く、ご、と、く、
黒、く、な、が、る、い、
千、鳥、な、く、な、り、
淡、く、た、な、び、く、
犬、も、ほ、ゆ、な、り、
眞、柴、の、籬、
尾、上、に、つ、ぎ、

是不乘驢
風流兒、
而敗笠破
衣一薄命
之婦、必
有許多之
因緣。

ふ、み、か、よ、ふ、
跡、た、え、て、
雪、の、夜、半、
あ、せ、み、ち、を、
雪、あ、か、り、
岡、野、邊、を、
歩、み、て、は、
つ、も、る、雪、
た、ど、り、て、は、

竹、の、下、道、
人、も、あ、ゆ、ま、ぬ、
川、風、さ、む、き、
獨、り、た、ど、く、
吹、雪、身、に、む、
獨、り、と、ほ、く、
破、れ、一、袂、に、
拂、ら、ひ、つ、尚、も、
ふ、く、だ、む、髮、に、

貫くつらゝ
破れ笠に
破れごもに
行くなるは
果てならん
石地蔵
立ち玉ふ
孝子塚
立ちならぶ

れとつなほも
頭かしらを覆おほひ
身をつゝみてろ
いかなるひとの
老れふ媪おなるらん
雪ふうもれて
あたりをすぎつ
風にふかれて
ほとりをゆきつ

寒景令人
栗然。

やうくりに

松の木蔭に

たどりきて
つくぐと
顔あてゝ
身はむかい
たのしみ
今こそそは
肌をきる
身はむかい

なげきのいきを
涙の袖に
れもひかこちぬ
玉とたごへて
雪にはあれど
あはれかな
太刀とれほゆれ
花ともめで

有照應、
有波瀾、
剪裁巧手。

總是常山
蛇勢之首
尾相應之
法

よ、ろ、こ、び、い
今、あ、ろ、は
肌、を、つ、く
雪、に、な、く
何、に、と、な、く
行、末、を
か、こ、つ、に、や
風、に、吹、ゆ、る
な、よ、と、な、く

雪、に、は、あ、れ、ど
あ、は、れ、う、た、て、や
鎗、と、も、見、ゆ、れ
千、鳥、の、聲、も
今、は、我、身、の
あ、は、れ、と、思、ひ
な、く、に、や、あ、ら、ん
犬、の、遠、音、も
今、は、我、身、の

一景一狀、
寫得、不忽、
的々、歴々、
情態、活々、
是主、人運、
是筆、大得、
之筆、大得、
處、得、意、

こ、の、は、て、を
か、こ、つ、に、や
つ、ぼ、す、み、れ
我、目、に、は
石、地、藏
閻、羅、と、も
忍、辱、の
血、に、さ、け、て
波、羅、蜜、の

か、な、し、と、忍、び
吠、ゆ、に、や、あ、ら、ん
つ、み、お、か、い、あ、る
慈、悲、の、み、顔、の
呵、責、の、顔、の
お、も、ひ、な、さ、れ、て
花、の、御、口、の
羅、刹、と、見、ゆ、れ
柳、の、眉、も

カ
シ

外境之酷
寒可忍、
心裡重罪、
則不可堪。

逆立ちて
越一方を
孝子塚
凍るほ
いとゞ
行く方を
いとゞ
いよひよ
ますますに

夜叉とも見ゆれ
忍ひ出てつ
いまながむれば
寒き我身も
汗ながるなり
さしていそげば
愛宕ねろしは
嵯峨野の雪は
ふりしきる也

レ

心なき
身の過を
心なき
身の罪を
今日にして
悔ゆれども
今にして
重ねても
あはれけふ

此の風さへも
責て吹くら
其の雪さへも
譲めて降ら
悔いの八千度
先にたゝどな
なげきの數を
ろの詮なしな
何處に宿を

八面玲瓏
之勝境却

是八寒奈
落之相。

求、め、て、ん、
 あ、は、れ、今、
 尋、ね、て、ん、
 獨、り、ご、ち、
 ふ、る、雪、に、
 獨、旅、
 吹、く、風、に、
 吹、き、す、さ、ぶ、
 求、め、て、ん、
 庵、も、が、な、や、
 何、地、に、家、を、
 丸、屋、も、が、な、と、
 涙、は、ら、は、ら、
 又、杖、と、り、て、
 足、も、と、ぼ、と、ぼ、
 迷、ひ、行、き、け、り、
 風、は、い、よ、い、よ、
 風、は、い、よ、い、よ、

闇中一道

さ、え、ゆ、き、て、
 降、り、し、ぎ、る、
 つ、も、り、き、て、
 か、く、ば、か、り、
 誰、が、家、を、
 燈、火、の、
 木、の、間、よ、り、
 か、く、ば、か、り、
 誰、が、庵、を、
 誰、が、庵、を、
 夜、色、沈、々、
 雪、は、ま、す、ま、す、
 曠、野、寂、々、
 更、け、行、く、空、に、
 雪、に、小、暗、き、
 影、も、ほ、の、か、に、
 見、え、ろ、め、に、け、り、
 さ、び、し、き、小、夜、に、
 風、に、た、ゆ、め、る、
 風、に、た、ゆ、め、る、

光明、獄
裡過佛。

木、魚、の、
 山、邊、よ、り、
 手、は、誰、の、
 今、こ、ろ、は、
 こ、は、誰、の、
 け、ふ、こ、ろ、は、
 と、ば、か、り、に、
 雪、道、を、
 や、う、く、に、
 老、媪、は、ひ、と、り、
 た、と、り、く、て、
 歩、み、き、に、け、り、
 そ、こ、に、や、と、ら、め、
 棲、家、な、る、ら、ん、
 ろ、こ、に、い、ず、が、め、
 庵、な、る、ら、ん、
 聞、え、い、て、け、り、
 声、も、は、る、か、に、

如見。

眞截説來、
令人驚覺、
一番。

碧海蒼天
大奇過。

柴、の、戸、を、
 た、と、な、へ、ば、
 尼、法、師、
 い、ら、へ、つ、ゝ、
 そ、と、ひ、ら、き、
 あ、な、や、あ、な、
 繼、母、上、に、
 あ、な、や、あ、な、
 小、櫻、に、
 年、ま、だ、あ、か、き、
 い、ざ、や、こ、れ、へ、と、
 雪、の、扉、を、
 顔、見、合、せ、て、
 こ、は、ろ、も、い、か、に、
 こ、は、し、ま、し、か、
 こ、は、ま、た、い、か、に、
 あ、り、は、べ、り、か、

はづかーや
 とばかりに
 此處をしも
 小櫻は
 引きとろつ
 手をとろつ
 あゆみゆく
 血のなみだ
 ほだくべて
 面目なーや
 老媪はやをら
 にげんとするを
 いろぎ袂を
 こゝゆる繼母の
 れくへともなひ
 疊のめにも
 流志おがらに
 燃ゆるいろりに

筆端自在、
巨細分明。

情事可掬。

導さて
 繼母上の
 小櫻の
 かくと見て
 身の過を
 ろれと見て
 身の罪を
 かなしさに
 千行せんこうの
 れのがころもを
 身に覆ひてぞ
 わたはるさまを
 繼母はいよく
 深くも愧ぢつ
 繼母はますく
 いたくも悔いつ
 堪へずやあらん
 涙はらく

看、看、他、善、
善、業、報、善、
毫、釐、不、委、
世、貧、婪、無、
道、之、者、
朝、夕、論、之、
以、偽、鑑、焉、。

く、や、し、さ、に
萬、斛、の
唯、一、ば、一
諸、共、に
や、う、く、に
老、媪、よ、り
あ、は、れ、身、は、
あ、お、ろ、ろ、の、
あ、は、れ、身、は、

堪、へ、ず、や、あ、ら、ん
涙、ほ、ろ、く
言、葉、も、あ、く、て
泣、き、一、づ、み、一、が
涙、は、ら、ひ、つ
語、り、い、で、け、り
慳、貪、邪、見、の
天、魔、に、つ、か、へ、
煩、惱、利、欲、乃

好聯。

け、う、と、い、の
い、く、ろ、た、び、の
か、な、い、み、の
い、く、ろ、た、び、の
徒、浮、徒、く、
徒、雲、の、
ま、ぼ、ろ、い、の

波、旬、に、く、み、
淵、に、れ、と、い、
い、く、ろ、の、民、を、
海、に、い、づ、め、つ、
意、の、駒、は、
富、貴、の、野、邊、に、
心、の、猿、は、
榮、花、の、山、に、

勸カ

大慚愧 悔恨滿身 汗血悉披 攪之惡人 於之憎亦 無可憎

對聯精。

姫○か○い○解○女○こ○い○か○
へ○く○れ○の○そ○か○小○
か○か○郎○の○み○た○
と○花○か○び○と○松○

馳○夫○ろ○春○か○繩○飛○鞭○
せ○な○の○の○く○に○び○ふ○
行○る○ひ○の○な○さ○さ○
き○と○ど○夜○へ○さ○り○
て○は○半○は○へ○て○へ○

操○責○勤○財○そ○責○
の○め○め○の○寶○の○
色○の○も○い○ひ○露○
を○る○け○ん○ふ○を○

汝○ろ○汝○過○つ○汝○隨○汝○
が○が○ぎ○な○が○ひ○が○
行○す○す○が○い○も○
末○く○彌○り○ま○も○
の○ひ○生○も○せ○め○
の○の○の○す○の○す○

故有自然
三塗無量
苦惱大
聖痛誠章
々有驗

身○の○過○を○
鏡○に○ぞ○
か○く○ば○か○り○
あ○り○そ○み○の○
身○の○罪○は○
秤○に○ぞ○
風○す○さ○ひ○
真○夜○中○に○
閨○の○戸○を○

は○や○淨○玻○璃○の○
う○つ○り○や○す○ら○ん○
あ○し○き○こ○と○の○み○
水○よ○り○ふ○か○き○
は○や○業○道○の○
か○り○~~や~~○す○ら○ん○
雨○ふ○り○そ○ぼ○つ○
燈○火○く○ら○き○
あ○け○て○入○り○ぬ○と○

白○波○の○
黄○金○て○ふ○
財○寶○て○
其○の○上○に○
此○の○肌○に○
こ○れ○や○こ○の○
い○た○つ○き○の○
こ○の○夜○よ○り○
そ○の○日○よ○り○

あ○ま○た○よ○せ○來○て○
黄○金○を○う○ば○ひ○
財○寶○を○ぬ○す○び○
か○く○も○手○傷○を○
れ○は○し○さ○り○け○り○
手○傷○や○が○て○
病○と○な○り○て○
な○や○み○の○淵○に○
痛○み○の○海○に○

落ち入りて
 なやみく
 苦しきは
 いかにありか
 沈みはて
 痛みく
 かなしきは
 いかにありか
 身にははは
 黄金なければ
 薬だに
 買はんすべなみ
 家おはは
 汝も居ざれば
 看護さへ
 受けんすべなみ
 終に身は
 ものこひのごと

終に身を
 かたゐのごとく
 雨のひも
 そこにさすらひ
 風の夜も
 こゝお迷ひて
 はるくど
 八重の沙路に
 かぢまくら
 ゆられく
 やうやうと
 雪ふるさどに
 くさまくら
 かさね重ねて
 かくこそは
 歸へりは何に
 いとせめて
 我が生れて

自是人間
一片良心。

故郷の

土とがならん

心よ

かへりきくなれ

かくころは

もどりーは何に

ほのかにも

我がせこのこと

汝が身の

事をもきかん

心よ

もどりきくなれ

さはあれど

かゝるすがたの

汝にーも

かゝる我身の

此處にーも

あはんところは

思はね

願ひもなさね

とばかりに

こわつくらひつ

袖びちつ

老媪のかたる

其のをり

雪の下を

あはれに

響き聞ぬ

愕然。

僅々十數
字、却是
甚多趣。

あなやあな

こはろもいかに

我せこの

景之ぬーは

叙事之上
乗。

玉の緒を

かくもなかなく

人の手に

きられまゝか

前卷未必煩絮細說、至此方借老嫗之口、輕々點出、布置之妙、叙事之巧、作者焦慮、不可不思。

あなやあな
妻の身の
かなしくも
徒に
おはやがで
誰をしも
すはやがて
誰をしも
そはとまれ
こは又いか
いらぬこととて
命日をさへ
すぐーありーか
我身のどがよ
恨みなげかん
我身の罪よ
恨みかこたん
望月主に

規律厳正、
筆々生動。

汝がかはり
斥候の
けなげにも
さてはまた
軍はかり略ごと
勝つとを
さがしくも
かこますに
山をもちて
軍司令部に
其の復命かへり
なうはてしとや
帷幄うちの中の
これにをよりに
千里の外に
定めてしとや
岩根こいしき
壁となしける

如讀史記。

そ、萬ばん、こ、い、湯、川、め、い、金、
こ、ゝ、か、を、ぐ、か、城、
ま、卒そつ、に、ば、池、も、ら、ば、の、
し、し、か、の、す、か、り、の、
も、も、も、り、の、て、に、り、の、

敵、え、一、堅、そ、濠ほり、荒、堅、ろ、
は、こ、夫、く、の、と、波、く、の、
真、ろ、當、あ、平、な、さ、あ、り、牡、
砂、破、ら、ら、り、壤、し、け、あ、し、丹、
の、ぬね、ば、か、城、る、ぐ、か、臺、

拔、望、力、あ、い、た、い、あ、つ、
群、月、に、は、と、も、な、は、は、
に、の、が、は、れ、も、ち、づ、れ、も、
に、の、が、は、そ、ろ、え、ま、こ、の、
に、の、が、は、く、で、の、は、を、

基、ま、よ、君、終、葉、い、穂、集、
お、た、り、の、に、末、ば、の、め、
せ、た、し、の、に、れ、の、の、
し、候ばた、と、は、威ひ、の、ち、
か、の、へ、の、か、の、露、の、ち、
か、の、へ、の、か、の、も、す、か、

忠孝兩全、之偉行、却令卷中、最陋之人、物揚、讚嘆、稱揚、謂牛溲、馬勃、皆是、藥籠中物、者。

其のほまれ
あせぬども
此のひかり
つぎぬども
こは國の
かくてころ
ろは家の
さりながら

鴨縁江は
あせせざらん
長白山は
つぎやせざらん
ほまれなりけり
忠も立ちけれ
ひかりなりけり
孝もとげけれ
いたでをうけし

欲聞豈獨
老媪已耳。

五郎主
いたつきの
うち伏して
いざやこの
さはあれど
いざやその
さはあれど
小櫻と
繼母上の

さきくればすか
病のとこに
れはしはせぬか
なげきはさるな
其の先きいかに
つらさはさるな
此の次ぎいかに
涙ながらに
のあまふ言に

勁彼ニ如内有三以鳴松中寓彼卷齣郎與段化瀝紅佳
 語瀝春有哀則冬籟保壯則中哭前大成奔淚人
 此々落雨怨、悟夜稷望、悲聯真父卷詩此流、灑
 句簡花蕭、理中也、猶愁中壁是之五扁一、灑眼

讀來、不
 覺暗然。

は、か、な、い、や、
 さ、て、終、に、
 夕、日、影、に、
 た、え、く、に、
 か、な、い、く、
 國、の、の、
 君、の、
 誓、ひ、
 ろ、の、ご、と、に、

は、げ、ま、さ、れ、
 物、語、
 さ、て、終、に、
 朝、日、子、の、
 や、う、や、う、に、
 仇、敵、を、
 さ、は、あ、れ、ど、
 五、郎、ぬ、い、
 い、ま、い、

ふ、か、で、を、ね、ひ、て、
 此、の、日、も、く、れ、て、
 う、す、れ、ゆ、く、頃、
 い、き、も、と、だ、え、て、
 み、ま、か、り、ま、い、ぬ、
 く、さ、む、す、か、ば、ね、
 み、つ、く、か、ば、ね、と、
 主、の、誓、の、
 は、て、玉、ひ、い、を、

な、ぐ、さ、め、ら、れ、て、
 な、ほ、も、續、け、ぬ、
 其、の、夜、も、い、ら、み、
 あ、か、ね、さ、す、頃、
 妾、は、父、の、
 う、ち、と、め、は、て、ぬ、
 い、た、で、の、上、の、
 其、の、夜、に、又、も、
 仇、敵、の、太、刀、に、

何人並春孤秋
事世帶花影月
加悲增無寂無
之慘愁賴然情

腕妙遺其華來浩萬
腕妙址華清宛自種
、觀麗宮有筆浩感
妙、之見吊外嘆慨

切失而瑰有有聯
之悲其麗有法典々
音歎中爛則據句々
、痛不、、々、

層所是心悉彫力故扁此之各々
之以比之莫句一作之扁妙有綺
妙有前極不琢倍者主是獨婉
焉一扁、刻字、用眼、全唯特

つ、い、長、空、さ、蜻、さ、大、八、冥、
れ、と、る、る、千、
な、と、月、蟬、を、蛉、を、椿、歳、靈、
し、し、な、な、も、を、も、
と、く、の、の、と、の、と、も、を、も、

五、常、あ、習、あ、色、恨、袖、な、
百、な、あ、あ、に、む、に、げ、
と、り、れ、ろ、れ、に、と、と、く、
せ、と、身、こ、さ、と、さ、と、
を、と、は、と、は、へ、は、へ、は、

か、尾、秋、跡、い、跡、こ、あ、秋、す、
こ、を、も、に、ひ、る、と、む、
ち、上、の、ま、せ、な、し、世、よ、世、
こ、の、ね、の、ら、の、い、ろ、き、
ろ、雲、夕、び、夫、ひ、父、ふ、こ、く、
す、を、に、し、は、し、は、に、ぶ、に、
れ、を、に、し、は、し、は、に、ぶ、に、

春、あ、う、れ、う、は、大、れ、大、
と、き、つ、も、つ、あ、和、も、
樂、ら、せ、ひ、せ、か、な、は、和、
め、み、は、み、し、で、ゆ、
ぬ、の、べ、の、け、で、げ、錦、
し、れ、世、れ、世、れ、し、な、
む、と、の、と、の、と、こ、れ、の、

水盡而山、
一層一層、
入佳境。

行文流麗
宛轉宛麗
如瑪瑙盤
上、进水盤
品珠、再
三朗誦、
不覺倦厭。

風吹けは
さはあれど
入りはてし
よ、ふくも
風ふくも
梓弓も
いとく
つれな
春くれば

さにはあれど
散りはてし
よ、よ、よ
春きても
花にあらば
契りにあらば
池にあらば
思ひを
あはれ此の

又月いでぬ
浮世の雲に
こひの父は
幾千萬の
いでぬ月なり
春のあし
梢の風を
恨みおろす
花さきぬ

浮世の風
妹の夫は
幾千萬の
さかぬ花
雙蛺蝶
こは夢なる
こは夢なる
兩鴛鴦
ろはまほろ
つがひはなれ

痛怨之極。

秋の蝶
散りはて
雨ろほち
あはれろの
冬鴛鴦
葦枯れて
みぢれふり
さればよ
長〜に

たの花は
枯れ梢に
風さゆるなり
つがひはなれ
たのめ池は
凍れる水に
霜さゆるなり
久方のあめ
はてどとばいへ

皇天何支
無情。

時ありて
此の恨
されむよ
とことそに
折ありて
其の恨
さはあれど
恨らむとも
かこつとも

盡きやぬらん
あつきな
あらがねの地
盡きどとえいへ
はてやぬらん
おどてばてん
幾代をかけて
そのかひなな
その詮なし

詞句痛功、
一字一淚、
一語一咽、
真是錐心、
出血不心、
可多讀之、
文字。

う
カ

自有一種
感慨、
一將功成、
一將骨枯、
一浮誇輕舉、
一狂舞亂醉、
一徒祝凱亂、
一者宜誦、
一此文以爲
戒焉。

と○ば○か○り○よ○
さ○て○は○い○も○
高○麗○の○野○に○
片○袖○を○
鞞○々○の○
さ○て○は○い○も○
漢○山○に○
な○き○が○ら○を○
肅○々○の○

あ○き○ら○め○は○て○つ○
あ○だ○い○野○な○ら○ぬ○
父○の○か○た○み○の○
葬○り○ぬ○れ○
喪○車○も○さ○し○ら○す○
鳥○部○に○あ○ら○ぬ○
夫○の○か○た○み○の○
め○れ○く○り○ぬ○れ○
旛○幢○も○な○が○れ○す○
立○つ○る○卒○都○婆○も○
杉○の○枯○れ○江○だ○
ま○つ○る○み○は○か○も○
石○の○か○あ○あ○れ○
嵐○の○音○は○
歌○ふ○に○あ○ら○で○
愛○別○離○苦○と○
か○な○し○か○り○け○り○
流○の○聲○は○

慘風落英、
悲雨硝香、
無漏道芽、
漸將發。

益流麗益
宛轉大珠
小珠踏雜
環走。

綺筆麗句、
說出諸行、
無常之大、
哲理。

萬里の詩
なにとなく
聞えきて
あなかな
此の世には
鐘の音に
其の聲の
あなはかな
此の世には
花の枝に
其の色
昨日迄
紅顔の
今日のは
白頭の
あなはれ
何處にか
あなあれ

とふにあらで
會者定離と
はかなかりけり
とてもかくても
祇園精舎の
諸行無常の
たえぬなりけり
とてもかくて
帝羅雙樹の
生者必衰の
多江ぬなりけり
ゆかすと見て
其の美少年
あわれと見ゆる
此の半死翁
何地に去りて
死して行くらん
何處より來て

轉用古句、
鑄自在、
特見換骨、
晚體之巧。

あいあす 竈み 仙れ こ
 はか はべ かの もれ の
 れに れら ど人 ひの の
 そし こぎ さき へ の もか
 をて をも の へ の もか

ま死もみ神み薬ほ常
 つをとまかをまもだ盤
 らのめかり祭りけける松
 ぬがるひとけるを
 民べとのを
 のきとのを

海動歸止流結秋夕生
 どか りま れびに 生
 かぬ もり てて 歸り
 は小 なも はは消り
 り田 させ 行 消 へて
 ぬとすすき にてれん

畏友櫻雨、嘗作死論、立論正核、字句端麗、極言論無、常力大、文勢筆力、大抵與此、扁伯仲、而至此、美妙之赴、彼遂于此、一籌于此。

い○か○に○い○て○
 責○育○は○
 力○さ○へ○
 留○侯○は○
 智○恵○さ○へ○も○
 さ○る○を○な○ほ○
 な○き○我○は○
 さ○る○な○だ○ほ○
 な○き○我○は○
 九○重○の○
 吹○き○至○る○の○
 い○か○し○に○て○
 軒○の○端○を○
 百○敷○の○
 ふ○り○あ○た○る○
 い○か○に○い○て○
 柴○の○戸○を○
 さ○れ○ば○我○が○

死○を○の○が○る○べ○き○
 今○は○た○い○づ○ら○
 今○は○た○い○づ○ら○
 た○の○み○と○な○ら○ね○い○
 今○は○た○い○づ○ら○
 た○よ○り○と○な○ら○ね○い○
 其○の○ち○か○ら○だ○に○
 い○か○に○な○さ○な○ん○
 い○か○に○な○さ○な○ん○
 此○の○智○恵○だ○に○も○
 い○か○に○な○さ○な○ん○
 雲○の○上○ま○で○
 無○常○の○風○の○
 賊○が○伏○屋○の○
 あ○だ○に○す○ぐ○べ○ぎ○
 庭○の○興○ま○で○
 生○死○の○雨○の○
 葦○の○丸○屋○の○
 あ○だ○に○す○ぐ○べ○ぎ○
 袂○に○い○つ○か○

如悟如怨、
情纏絡。

香消粉褪、
名花一枝、
遂作菁々、
菩提樹。

ぬぎかへて 振袖を 昨日迄 入る月 切り捨て 黒髪を 昨日迄 いとこ さいばろの さいばろの 定めめなき ことをしきの ことをおもひ 其の雨の されば我が ことの風

解腕の庭に 夫の御墓に 纏ひの花の あとを 菩提の門に 父の御墓に ながでみぢり うちさすてばつ 憂身を卒に 浮世を終に うき身をりけり かれをれもへば 浮世なりけり 彼れをのべは かくらん 袖にもいづか にもくらすん ぶさくらすん

出家未忘
情女流之
真相

絶佳。

純孝貞烈、
之動人、
由來如此、
貧婪無道、
之婦、
發此情愛、
甚鍾之、
亦不哉。

す○み○ろ○め○の○
あ○は○れ○父○
其○の○半^{なかは}
あ○は○れ○夫○
其○の○端^{はし}を○
れ○く○つ○ぎ○に○
言○の○葉○を○
故○郷○よ○
師○の○尼○を○

と○ば○か○り○に○
小○櫻○は○
し○か○そ○が○に○
ろ○の○繼○母○は○
あ○な○や○あ○れ○
ぬ○げ○よ○と○て○
あ○な○や○あ○れ○
切○れ○よ○と○て○
尼^{あま}御^ご前^{まへ}と

袖○に○や○つ○し○ぬ○
蓮○の○の○臺^{たいや}の○
の○こ○し○玉○ひ○ね○
瑠○璃○の○し○と○ね○の○
あ○ま○し○玉○へ○と○
花○に○は○あ○ら○で○
手○向○と○な○し○て○
か○く○は○還○り○て○
あ○ふ○ぎ^まつ○か○へ○ぬ○

語○り○を○は○り○て○
泣○き○ふ○し○に○け○り○
語○る○を○き○て○
な○け○き○か○こ○ち○ぬ○
花○の○袂^{たもと}を○
纏○は○き^きせ○し○に○
緑○の○髪○を○
梳○ら○ざ○り○し○に○
終○に○な○る○身○の○

亦是婦女之情。

悲窮哀極、光景慘憺。

文勢一轉、悠悠堪々、秋月出雲、春海潮平。

眞氣逼人。

いかなれば、雪の肌、姿にも、尾法師と、いかなれば、花の口、姿にも、とばかりに、伏しまろび、諸共に、声をさへ、奥の間の、師の尾は、しづくくと、くさくさに、さてころは、不滅てふ、ときささどし。

かくも妙なる、玉のれもあ、汝は生れしぞ、終になる身の、かくもあでなる、柳の肩肩の、汝は生れしぞ、なげき沈めば、繼母はかこちて、小櫻なきて、たてし時しも、障子をひらき、數珠をつまぐり、いでき玉ひて、なだめ玉ひて、不生の園に、花の紐を、不常の庭にはに。

偈花宛至光星會權其其闡幽嚴之般法辨無豎言滔
 非妙讀慮目布頓攝拓入々之花信理盡妙以說千

中藏微塵、
 之經卷、
 手裡有雲、
 烟之才筆、
 遂末能作、
 其摩訶偈、
 陀也勢明、
 燿爛煥明、
 千紅百紫、
 打爲一團、
 映發雜彩、
 而整然無、
 亂、恰是、
 一枚蜀錦、
 大福田衣、
 萬象之大、
 本、乾、坤、
 主、至、元、
 佛、法、大、
 領、綱、

相°生°常°か°や°や°さ°さ°不°
 な°滅°に°ね°よ°よ°|°|°斷°
 れ°|°も°き°ま°教°示°て°
 や°は°も°|°の°の°へ°|°ふ°

水°求°波°あ°あ°當°當°体°法°
 の°め°の°は°は°相°体°な°性°
 て°す°こ°の°の°の°の°れ°
 外°も°外°の°の°の°の°や°は°

當°や°を°示°小°妙°玉°玉°月°
 相°が°|°|°櫻°蓮°ひ°ひ°の°
 な°て°ふ°ゝ°が°の°法°そ°い°影°
 れ°好°ご°ご°の°法°め°で°を°
 や°の°と°と°君°尼°れ°れ°を°

い°も°い°生°真°波°青°体°や°
 づ°ど°づ°滅°如°あ°海°當°が°
 ち°め°く°め°の°そ°原°な°て°
 に°え°に°め°の°た°原°れ°無°
 波°ら°水°波°水°て°れ°明°
 を°ん°を°よ°よ°れ°ゆ°や°の°

迷則凡夫。

悟則佛院。

生佛不二之妙旨。

掬むとても
さるをいも
すむ蚤の
さればこそ
すむ尼は
こゝをもて
やがて是れ
こゝをもて

くみやえざらん
迷の濱に
不二の庭に
悟の庭に
不異とながむれ
暗き無明は
照るる法性
照るる法性
暗き無明は

妙譬玄喩、
重々排陳、
疊障層巒、
成山馬、
羅敷仙區、
之勢。

覺不覺
何處にか
迷不迷
何地に
喩ふれば
宿り来て
或は又
うつりきて
やがて皆

當体全是
けぢめやらん
到處即一
分ちやあらん
濁れる池に
沈づめる月も
澄める小川に
淨べるる月も
を初なる高峯の

超信之玄、
天台之妙、
闡發莫遺。

月影に
やがて
月影に
既にか
法性か
己にか
眞如こ
不守自
不染淨
の性そ

離念無相の
生佛の
こをて
たばりて
こをもて
やかりて
川瀬に
野末に
とことはよ

かはらざるなり
たなみそらの
かはらざるなり
生佛不二の
離念無相の
不染淨不二の
不守自性の
こ故に
波は異なれ

そあ故にあ
水は一なる
あるは小笹
霰やえ形り
あるは尾花
露もれきぬ
氷とむすび
雪ともふりて
すがた定め

此則非莫捲飛汪十
 玄不此有天雪洋波
 理能手際動迸浩萬
 說腕涯地珠澗浪

甚兩具
 佳喻月
 點逝
 綴水

無○水○氷○よ○離○水○霰○よ○よ○
 相○と○と○し○念○と○し○り○
 に○い○と○や○に○い○と○や○く○
 て○ふ○も○よ○て○ふ○も○よ○に○

遷○自○雪○す○か○自○露○か○形○
 ら○性○と○が○は○性○と○た○を○
 ざ○は○も○た○ら○は○も○ち○を○か○
 る○常○ふ○を○さ○は○た○か○か○
 な○に○る○か○る○な○り○に○も○
 り○に○も○へ○り○に○も○て○ぬ○

片○晴○い○又○遊○又○い○晴○片○
 割○る○は○み○く○み○は○る○割○
 月○も○で○つ○川○つ○も○も○も○
 は○い○割○る○る○水○る○い○は○
 は○は○る○な○り○は○は○は○は○

あ○は○曇○割○喻○
 る○て○る○れ○ふ○
 は○も○と○く○れ○
 た○せ○も○て○も○て○は○

高○又○い○晝○遊○又○い○晴○片○
 き○な○は○と○と○く○み○は○る○割○
 御○か○で○も○も○川○つ○も○も○も○
 法○る○逝○い○は○水○る○い○は○
 の○り○け○ど○は○は○は○は○

前來說理
今說證

觀苦、故、楚、愁、孤、增、苦、風、月、徒、觀、傷、心、故、綽、空、悠、々、故、々、愁、無、苦、無、花、鳥、於、我、最、適、意

煩○惱○大○善○提○
大○人○ろ○こ○大○
さ○る○を○乗○を○
無○常○よ○と○
或○は○又○

教○法○真○如○念○
一○三○一○
波○羅○刹○那○
生○死○を○
般○涅○槃○
一○三○一○
學○念○
一○三○一○
教○法○真○如○念○
一○三○一○
波○羅○刹○那○
生○死○を○
般○涅○槃○

煩○惱○斷○
善○提○佳○住○
迷○に○
悟○に○
觀○空○得○道○
善○薩○と○ぞ○い○ふ○
花○の○飛○ち○る○に○も○
世○を○う○ち○か○こ○ち○
葉○の○落○る○に○も○

無○明○は○也○が○て○
生○滅○も○也○が○て○
深○く○さ○と○れ○ば○
無○央○數○劫○の○
具○足○な○し○つ○
阿○僧○祇○耶○の○
成○滿○な○し○つ○
速○く○は○な○れ○て○
涅○槃○に○遊○び○

住

遮羊鹿之
小徑、運
白牛大輪。

生○死○よ○と○
三○生○に○
身○を○か○へ○て○
百○劫○に○
年○を○へ○て○
也○う○く○ふ○
た○さ○り○き○て○
入○る○を○こ○れ○
小○乗○の○

熱喝如雷、
痛棒如雨。

二○乘○地○に○
那○落○迦○に○
か○し○こ○く○も○
い○み○ぐ○く○も○
か○く○ば○か○り○
か○く○ほ○か○り○
さ○る○を○な○さ○
ろ○を○ら○で○
な○げ○き○を○ば○

身○を○う○ち○な○げ○き○
二○々○聖○諦○
つ○ば○ら○に○観○
二○六○因○
こ○ま○か○に○修○
灰○身○減○智○に○
無○為○寂○滅○に○
觀○苦○得○道○
二○乘○と○ぞ○い○ふ○

減カ

みカ

墮○ち○入○る○よ○り○は○
寧○ろ○落○ち○ぬ○と○
釋○迦○文○佛○は○
牟○尼○善○逝○は○
呵○一○玉○ひ○け○り○
責○め○玉○ひ○け○り○
汝○は○か○こ○つ○ら○ん○
汝○は○な○げ○く○ら○ん○
と○く○う○れ○し○さ○に○

獅吼最高、
圓音更朗。

轉折之所、
弄翻一番、
亦是文字、
戲游三昧。

維摩曰隨、
其心淨即、
佛土淨觀。

經曰是心、
作佛是心、
是佛皆、
此意也、
倉三悟是、
則為變大、
地為黃金、
攪四海為、
酥酪、
容易。

詞句之奇、
猶七重帝、
綱七重帝、
宮七重帝、
相映、
以輝光。

う○ち○か○へ○て○
か○ち○を○ば○
ひ○き○か○へ○て○
此○の○身○こ○そ○
凡○夫○に○こ○も○
其○の○世○こ○そ○
西○に○こ○も○
あ○ら○し○山○
曼○陀○羅○の○

大○堰○川○
功○徳○池○
峯○の○風○
妙○妓○樂○
底○の○砂○
寶○莊○嚴○
或○は○汝○
應○法○の○
或○は○汝○
そ○の○が○

世○を○樂○し○め○
と○く○よ○ろ○こ○び○に○
身○を○た○の○し○め○
清○淨○法○身○
あ○る○に○は○あ○ら○ね○
寂○光○淨○土○
あ○る○に○は○あ○ら○ね○
に○ほ○ふ○は○や○が○て○
花○に○あ○り○け○れ○

ひ○び○き○は○や○が○て○
水○ふ○あ○り○け○れ○
ろ○は○天○人○の○
調○ら○ぶ○る○聲○よ○
こ○は○玻○梨○磔○磔○の○
飾○れ○る○色○よ○
や○つ○せ○る○袖○も○
妙○服○な○れ○
冠○ふ○る○被○も○

現佛界不
可思議之
境界。

瑤○珞○の○か○の○
そ○れ○の○み○か○の○
恒○河○砂○の○
其○の○儘○に○
体○に○一○て○
あ○る○は○又○
微○塵○數○の○
其○の○盡○に○
性○に○一○て○

法華之圖

さ○れ○ば○こ○そ○
む○ろ○に○は○
天○人○の○
ね○も○ご○ろ○に○
さ○れ○ば○こ○そ○
み○ぎ○り○に○は○
變○易○の○
宛○羅○什○唇○
こ○ま○や○か○に○
こ○れ○不○来○

涅槃之妙

驚○の○み○や○ま○の○
我○此○土○安○穩○
み○ち○つ○つ○あ○る○と○
宣○は○一○け○れ○
鶴○の○林○の○
如○來○常○住○
あ○る○こ○と○な○し○と○
宣○は○一○け○れ○
塵○点○劫○の○

寶○冠○な○れ○や○
常○に○變○れ○る○
有○為○の○諸○法○も○
如○是○真○實○の○
變○ら○ざ○る○な○り○
毎○に○易○は○れ○る○
遷○流○の○娑○婆○も○
入○一○法○句○の○
易○ら○ざ○る○な○り○
性○に○一○て○

一部法華
囑累品

昔よりの
法身の
本懐の
これや
さとり
より
或は又

覺をと
あれいで
教説な
金剛喻
滅を
をへ玉
醍醐味
老媪の
大方人
え

廓然開悟、
文字洞然。

此の旨を
つかの間
とばかり
しかすが
よろあび
窓の戸も

きもに
めな忘れ
さとし玉
二人はい
うれひの
ひらくを

歡喜信受。

朝日影
うらくと
ほのく
窓の戸も

雪よりの
よべの嵐
雪よりい
うれひの
ひらくを

花紅柳緑

菩提宗燕、語鶯啼般、若象、如、是紅情、如、是薄命、究、竟歸入、大、圓覺、山、高而水長。

カ聲

嵐山、今こそは、大堰川、今こそは、雪のすがたは、清淨身よ、水の流る、廣長舌の、磬ときくらめ

山色溪聲一結、是神龍掉尾之法、全卷之面目爪牙、悉皆舊飛活動、勢旺口、尤高餘絕佳絕佳。冬卷是全扁之大團圓、如是因、如是緣、如是果、星羅川派之諸相、拱斗朝海、一切歸入、如是究竟之真性、作者本領精神、實在于此矣、全卷都兩段前半則流轉門、孤蝶影寒、隻鴛夢冷、天荒地老、

花落月黑、俊傑義烈之勳、徒埋香骨于韓山、美人貞節之操、空沒玉顏於緇衣、總可哭可歎可泣之慘事、煤毒婦泣血之懺愧、說去說來、筆々悲鳴、一讀以可了生滅離轉變無極之世相也、後半是還滅門、忽落下一箇神尼於天外來、蓮眸皓眉、慈容藹然、憐箇薄命之佳人、靈心慧舌、無礙自在、宜說大乘之妙義、解愁生歡、排妄見真、廓然令体達真俗不二之大圓覺、文詞總洸洋汪放、尤怪陸離、筆々放金光、字々生蓮花、真如無爲之妙旨、說得十分透徹、讀之一回、如恍惚羽化、登兜率遊補陀焉、實是塵沙界中不二之至文矣、華嚴曰、佛雅思淵才、文中王、作者得之歟、夫得之歟。

六月十日

二州橋畔僧院燈下敬讀



全篇大觀、總一千一百餘偈、偈有長有短、句凡四千五百有餘、五七爲調、偶對爲格、井井布叙、一絲不亂、真是偉大之雄扁、皇朝詞壇、未曾有之大作也、唯此一已以足爲多矣、況於語句之烹鍊精鑄、造構之刻思奇絕、命意之深玄雄渾揮、揮南華龍門之彩筆、說華嚴法華之至高邪、謂古昔、西梵迦多衍那、婆須密多、婆蘇槃豆、那伽闕刺樹那、阿濕婆瞿沙等、大小乘之諸大聖哲、立言濟生、概妙偈

雄頌、光闡大法咳玉唾珠、粲然回章雲漢、支那禪家淨門之諸德、亦以警拔富瞻之歌詞、說殺活自由之旨、讚紫雲蓮花之境比々莫不然、皇朝固秀麗之邦、風光絕奇、乃擷華采麗之詞、讚揚佛乘、實其所、廣大之理、絕妙之筆、由來不相離、實如是、所由雄風巨海、相應相待、以有烟波万頃白濤滔天之奇觀也、今也文運奎昌之世、而釋門有文者、寥落如晨星、何夫衰之甚邪、主人躍然、蹶起于此間、揚朝陽之輝、而歌圓覺之理、是僕所以一層爲多于松雨子也、以是翫賞不措、禪餘課後、每卷興來則信手評之、語々滅裂、雖無些許炬眼擇出卷中佳處、而忘醜見拙強顏示君者、以竊有期于君已耳、嗚乎由來高山流水、知音酷少矣、江湖果能有味此至文、

解妙趣邪否、任他、青山固高、流水自長、不盡乾坤、無邊風月、到處自湛然矣、六月下澣一日、礫川環翠書樓、淡々樹色、淺々山光窓下。

辱知同窓 僧 海旭敬讀

畏友 松雨老兄硯北

吉岡呵成批

流麗典雅の四字を以て此作の長所を評すべし遊漫
稚弱の四字を以て此作の短所を評すべし然れども
長短相較して其剩す所を取らば亦以て優に佛教文
學一刷新の先聲とするに餘りありと信ず作者今年
少前途亦遼遠若し勉めて止ざれば其造詣するところ
未だ知るべからず庶幾ハ社會の我佛教文學の爲
めに這個の健兒を愛育保被せんことを余や作者と
郷而も戚屬の親あり故に特に切望するところあり
と云爾

吉岡呵成安批

高麗野の夜嵐批評

時事新聞評

佛教附録の高麗野の夜嵐ハ單に筆のあとよりいふも近來の作
家中稀れに見る所の新体詩なり

東京朝日新聞評

「佛教」ハ一月初刊より大に改良を施し帙幅をも擴め且つ井上
徳定氏の高麗野の夜嵐と題する一大韻文を附録となせり

東亞說林評

「佛教」ハ新年の初刊より大改良を加へ文學的附録をも添へた
りき附録の新体詩の高麗野の夜嵐と題し井上徳定氏の作にし
て明治年間韻文界の第一長篇たり佛教界また好詩人ありとい
ふべし

青年文第一號

「佛教の一大長歌」雜誌の新年初刊の新躰詩中鉅作と稱すべ
きもの二、一ハ「帝國文學」に於ける鹽井雨江氏の「深山の
美人」一ハ「佛教に於ける井上松雨氏の「高麗野の夜嵐」な
り」とす是蓋し漸く大文學の將に現れんとするの徴として見
るべきなり殊に後者の如きハ春夏秋冬の四卷に分ち、大幅の
紙數三十五頁を埋め、明治文學界否な寧ろ日本の韻文中に於
て未曾有の長篇なりとす、着想敢て奇警と稱すべからざれど
も全篇句ハ殆ど悉く對聯を以て成り、流麗誦すべし、殊に其
冬卷ハ作者が最も力をうきし所、典雅の語を以て佛教幽玄
の想を歌ふ所、作者が佛教者たるが爲に然るものなれども又
讀者に高妙の感を喚起さしむるに足る、あゝ雨江氏の終に彼
よ一籌を輸せり

淨土教報評

雜誌佛教は本月分第九十八號より大に紙面を擴張し(中畧)本
號の附録高麗野の夜嵐は松雨山人井上徳定氏の手になり三十
有餘頁の長篇之を春夏秋冬の四卷に分ち日清戦争を経とし佛
教の理想を緯とし之を雄壯なる武夫と窈窕たる美人に假托し
流麗の筆典雅の調を以て縦横自在に綴りたるものにして近時
韻文上の大作と云ふべし思ふに此作一たひ世よ出では自から
文學界の視聽を驚かすに足らん殊とよ其の佛語を藉て巧に之
を應用せられたること讀者をして知らず識らず佛教の微妙な
ることを悟らしむるに足るべし兎に角此の如き大作の我佛者
の手より出でたるハ佛教文學の光輝を添ゆるものと云ふべし
而して之を以し綺語を弄すと云ふが如きに至てハ未だ共に文
學を談すべからざるなり

手、帟、

吉岡、呵、成、君、書、翰、

今日瀛車同乗者より佛教附録貴下の
新体詩借覽仕候、首款二三節にして未だ卒章に至らず候へど
も漸く蔗境に入るの概は想見致候、感々服々優に此種の作中
一頭地を出す者と存候他日刊行の節ハ廣く社會の批評よとひ
錦上添花の觀を全ふせらるべし感吟の余一言をよす前途乞ふ
自愛。

茨木停車場にて

八幡 呵成

井上 徳定 殿

大内、青戀、君、書、翰、

新年の初刊佛教誠によく出来御骨折
の段感謝に堪へず候徳定上人の「高麗野の夜嵐」實に大手筆
敬服の至り追々かゝる青年の文學者のいづるうれしきとに御
坐候(以下畧)

佛教學會宛

大内 青戀

佛、教、記、者、古、川、老、川、氏、書、翰、

未だ拜韻を得ず遺憾に御
坐候過日ハ「高麗野の夜嵐」佛教よ御投寄被下奉多謝候韻文
界始まりて已來大作小生自ら吹聴致せし如く實に敬服致候爾
來何卒日本文學界に大に花を咲かす御勞力偏に奉願上候(中
畧)「佛教」へも何卒續々御高作御投寄被下度候佛教界詩人な
まきの折柄小生等貴兄の出でたるを見て小躍りしたる者よ御坐
候敬具

三月一日

古川 勇

井上 徳定 様 硯北

明治二十八年七月五日印刷
明治二十八年七月十四日發行

著作無
發行者

東京市小石川表町七十七番地

井上 徳定

東京市京橋區山城町六番地

印刷者

田中 正藏

東京市牛込區喜久井町

發行所

教報社書籍店

同市淺草吉野町

同

佛 教 學 會

